ISSN 0918-7448

グローバル化時代の今、文化多様性の価値を問う

人類学研究所通信

第24号

2023

巻頭言 …… 2
特集
私の関心
コロナ禍とフィールドワーク・研究計画変更（吉田竹也）…… 3
The Heritage of Shiga Shigetaka（Andreas Riessland）…… 5
プロジェクト研究員の活動
Opportunity and Challenge for Asian Scholars in English-Language Academic Publishing: The Case of Asian Ethnology
（Benjamin Dorman、Harmony DenRonden）…… 8
Book Reviews in Asian Ethnology: History and Development
（Benjamin Dorman、Paul Capobianco）…… 11
沼澤喜市資料整理プロジェクト報告（2023年度）（加藤英明）…… 14
国際化推進事業報告
2023年度公開シンポジウムと南方科技大学への出張報告（張雅）…… 16
活動報告 …… 18
研究業績 …… 38
刊行物 …… 41
スタッフ …… 42

南山大学人類学研究所
Anthropological Institute, Nanzan University

巻頭言

渡部 森哉（人類学研究所・所長）

人類学研究所通信の第24号（2023年度版）をお届けする。

2023年度は、学長方針に従い、3研究所（人類学研究所、南山宗教文化研究所、社会倫理研究所）のコラボレーションを進めることを目指した。まず人類学研究所と社会倫理研究所共催企画として葬式関係のシンポジウムを開催した。また、人類学研究所と南山宗教文化研究所の共催企画として、暦関係のシンポジウムが立案されたが、2023年度中には間に合わず2024年度開催となった。関係者にお礼申し上げる。もう過去のことのように思えるが、2023年5月8日に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行し、コロナ以前のように懇親会が開催できるようになった。3研究所の共同の企画案は、懇親会の場で練られたものである。今後も懇親会の場で、様々な研究のアイディアが醸成されることを期待したい。

2023年度は、公開シンポジウムが4回、公開講演会が3回開催された。第1回の公開シンポジウムは他の企画のために来日したペルー人研究者をお招きして開催した。今後も、他大学の企画に参加するために来日する研究者を名古屋にお呼びして講演会を実施したい。来日する研究者を招へいする候補として人類学研究所を考えていただけるように、研究者間のネットワークを構築していきたい。

また2022年度に始まった共同研究会「デジタル化が生み出す新たな生／知のあり方―記録・身体・モノ―」も2年目が終わった。2024年度は3年目の最終年度で成果のとりまとめとなる。成果は論集の1冊となる予定である。共同研究会が研究所の活動として定着するように後藤明所長の時代から継続してきたが、ようやくリズムが整ってきたように思われる。この共同研究会は石原美奈子所員の指導の下、実質的に3名のプロジェクト研究員が采配した。また、宮脇第一種研究所員の企画した共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」には、外部の研究者が多く参加している。こちらの成果も楽しみにしたい。今後は、共同研究会に大学院生がより積極的に参加するような枠組作りが必要であろう。

2022年度に学内の予算による国際化推進事業「なりわいと移動の人類学」が開始した。この事業は主に中国を研究対象としており、2023年度にはその一環として公開シンポジウムが開催された。近年、中国への渡航が難しくなっている状況で、できる範囲で企画を推進した。2024年度はとりまとめの年度になる。国際化推進事業も人類研の活動として定着しつつある。国際化推進事業の募集は三年ごとにあるため、2025年度からの三年間の計画を立案する必要がある。

また2023年度は、学会など学外の団体や学内の他のセンターとの共催企画もいくつか行われた。人類学研究所が研究のハブとして機能し、多くの研究者が集い、交流する場になっていくことを期待したい。

私は2018年4月から6年間所長を務め、その間、多くの人の尽力により人類研の活動は軌道に乗ってきた。石原新所長の下で、さらに発展していくことを願っている。もちろん私も一兵卒としてできる限りのことはしていくつもりである。

私の関心

コロナ禍とフィールドワーク・研究計画変更

吉田 竹也（人類学研究所・人文学部人類文化学科）

この小論では、コロナ禍における私のフィールドワークと研究計画変更について記述することにしたい。

私は、観光を主要なテーマとし、奄美・沖縄とインドネシアのバリという２つのフィールドをもう20年ほどかけもちしている。きっかけは、2001年のアメリカ同時多発テロ事件と翌2002年のバリ島クタでの爆弾テロ事件であった。バリに中長期行けなくなったときのための対策を講じておく必要がある、と考えた私が出した答えは、国内外2つのフィールドで、それぞれに割く時間は短くなるが、その分集中して調査を実施し、これをひとつのテーマにまとめていくという、リスク分散型ではあるがかなりしんどい作業を継続することであった。

そして2020年にコロナウイルスが世界を席巻した。しばらくバリでのフィールドワークを見送ったことは、想定の範囲内であった。ただ、知人とのSNSでのやり取りを通して現地の情報を若干収集できたことは、ダブルフィールドワークをはじめた時点での想定の範囲外であった。

一方、国内の奄美・沖縄には、迷いながらも、結局夏に行くことにした。対面インタビューを平時のように実施することは控えなくてはならないが、私は観光地で数分程度のやり取りを重ねてデータを収集する手法に慣れていたので、社会的距離の確保に留意し、こうした短時間のインタビューのみを無理のない範囲で限定的に行うことは可と判断した。ただし、インタビューは二の次三の次、第1に参与観察、第2に図書館・博物館・資料館でのデータ収集、と肝に銘じた。こうした初めて経験する拘束型フィールドワークでいったい何ができるのか。私は、奄美・沖縄の4島地域の世界自然遺産記載に向けた現地の状況や受け止め方を可能な範囲で確認できれば、と考えた。参与観察で得たデータは断片的であったが、地元の人々の受け止め方について一定の感触を得ることはできた。そして、その感触を手掛かりに、政府がウェブで公開する世界自然遺産関連の会議資料やユネスコに提出した推薦書を読み解き抽出した論点を核にして、観光リスク論的観点から研究ノートをまとめた。「鮮度が大切な論文」とみなした編集委員会が年末に査読等の手続きを進めてくださり、これは2021年2月刊行の島嶼学会誌に掲載された。また、コロナ禍の現状を「観光恐慌」として把握する研究ノートも大学紀要に掲載した。

2021年には、コロナワクチン接種が日本でもインドネシアでもはじまった。この年の7月開催の世界遺産委員会で、奄美・沖縄4島地域の世界自然遺産記載は審議了承された。世界遺産推薦書は2019年2月にユネスコに提出済みであったが、2020年の世界遺産委員会はコロナ禍により1年延期されていた。この2021年8月には、前年ほどの躊躇は感じずに奄美・沖縄に向かうことができた。しかし、データ収集は、前年と同様、参与観察中心、インタビュー以外のデータ収集中心、インタビューは最小の範囲で、という方針で臨んだ。世界自然遺産関連の継続的な情報収集では、やんばる野生生物保護センター・西表野生生物保護センターが、一般来館者には閉館していたが、研究目的という趣旨をご理解くださり、快くインタビューに応じてくださった。このことに助けられ、この年の資料収集は再び軌道に乗ってきた印

象があった。この場を借りて、関係各位にあらためて感謝を申し上げたい。

また、2021年8月にはリニューアルされたひめゆり平和祈念資料館を4年ぶりに訪れ、この資料館とひめゆり学徒隊員のいまをあらためて観光論の視点から記述するという着想を得た。コロナ禍により、資料館は一時閉館し、リニューアルは2021年4月に延期されていた。実は、私は、2020年8月に奄美大島のホテルでNHK鹿児島のローカル番組を見て、このリニューアルを知った。当該番組は、NHK沖縄では2020年6月に放送されていたが、これを見る機会はなかった。奄美大島に2020年8月にいたことで、私はひめゆりに（再び）向かい合うきっかけを得たのである。このときの私のフィールドノート兼日記には「見たかったものを、ちょっと不思議な感覚だが、奄美で見ることができた」とある。研究トピック化する具体的な論点はその後に浮かんだ。ひめゆり同窓会は、ひめゆりの塔の所在場所を「霊域」とみなし、観光から遠ざけられるべきものとしていたが、塔の建立から数十年を経て、そこに観光資源となる平和祈念資料館を建設した。観光の外にあるべき霊域を観光の内部に取り込んだといえる、その認識転換について考察すること、これがひめゆりを主題化する核心部分になった。なお、コロナ禍は、結果的に、ひめゆり学徒隊生存者から資料館での語りの機会を奪うことになった。ただし、それは、彼女たちが亡くなった学友への思いとともにずっと携わってきた苦しい仕事からの解放の、遅い訪れでもあったと受け止めることもできる。このことも、どこかで触れておきたいと思っていた。

社会活動が徐々に戻っていった2022年には、夏の奄美・沖縄での資料収集を経て、世界自然遺産とひめゆり同窓会・平和祈念資料館に関するトピックを主題化する構想を固めた。コロナ禍以前、この2つを研究の柱に据えるという考えはなかった。しかし、コロナ禍中に収集したデータにもとづき設定が可能な研究トピックとして、この2つは最適解と考えられた。また、複数の民族誌的研究を総合した大枠のテーマを、現代観光の中心ではなく周縁や外縁を探究することとした。これも当初の計画にはない、フィールドワークとデスクワーク（文献研究・理論研究）を何度も往復してコロナ禍中に固めた枠組みであった。

渡航制限が緩和された後の2023年2月には、3年半ぶりにバリ島で資料収集を行った。SNSを通してコロナ禍中に得た現地の情報とそれ以前に収集していたデータを合わせて構想を練っていたバリ関連のトピックも議論に組み込み、この2023年には全体の成果をまとめる作業を進め、2023年の沖縄の慰霊の日に人類学研究所から『周縁観光論』を刊行した。

以上、2020年～2023年の研究とその変更、関連する若干のエピソードを記した。振り返ってみれば、私の研究だけでなく、フィールドの現場でのさまざまな出来事も、コロナ禍による変更や遅延を余儀なくされていた。それを多少なりとも議論に反映させることはできたと感じている。また、ダブルフィールドワークという苦行は、コロナ禍では功を奏したようにも思われる。体力がつづくなら、いましばらくこのスタイルを維持したいと考えている。

最後にひとつ。この小論の執筆依頼を受けた日、私ははじめてコロナに罹患した。この小論の骨子は、コロナ感染による自宅療養期間に、熱がおさまった後に書いた。これでコロナ禍に関連するものを締めくくることができればと、願っている。

付記
この小論は、JSPS 科研費19K12593研究成果報告書の内容に一部重なる。

The Heritage of Shiga Shigetaka

Andreas Riessland（人類学研究所・外国語学部ドイツ学科）

In the second half of the 19th century, Japan underwent an extraordinary transformation, changing from a secluded, feudalistic fiefdom to a modern and powerful nation state which, fifty years after the country's coerced opening, scored a victory in war against one of Europe's great imperial powers. The process of building this Japanese nation was the concerted effort of politicians, entrepeneurs, intellectuals and countless others who were motivated by their conviction that in the face of 19th century imperialism, Japan's continued sovereignty depended on a timely and thorough restructuring of both state and society, along the lines for a civilized nation as defined by the imperial powers of Europe and North America.

One of these Meiji modernizers was Shiga Shigetaka (1863–1927), politician, publicist, and one of Japan's foremost geographers, and it is on him and his ideas that my present research focuses. Today, Shiga's writings are barely known outside of a few special interest groups, but towards the end of the 19th century, both the man and his publications were remarkably popular among Japan's reading audience.

Throughout much of his life, Shiga was a keen participant in national politics, holding various government positions, as well as one term as a member of parliament, but his main occupation was geography which he taught at *Tōkyō Senmon Gakkō* (later Waseda University). He published several books on geography and geopolitics, among them his famous *Nihon Fūkeiron* ("On Japan's Landscapes",1894), a book about Japan's mountain areas which became an instant bestseller.

To safeguard their young nation state and to preempt any territorial claims by other nations, the Meiji period's various governments repeatedly set out to reaffirm (and, given the opportunity, to expand) Japan's national borders. As a geographer and politician, Shiga actively involved himself in this issue and, through his popular geography readers and textbooks, contributed much to the awareness among the Japanese public about the country's territorial expanse, and to their perception of this island chain as a coherent and unified nation.

His *Nihon Fūkeiron*, though, proved to be a much greater contribution to Japan's nation building project. With this book, Shiga fundamentally changed the way that many of his compatriots came to see their nation and its landscapes, particularly those parts of the country which until then had been viewed as the least appealing, the inhospitable stretches along the upper reaches of the country's large Alpine zones. This region, according to Shiga, was the nation's true heartland, an area of singular beauty where the spirit of Japan came to be felt most intensely. With this approach to the landscape, Shiga broke new ground in Japan.

This is not to say that landscape appreciation in itself was a novelty to the Japanese. On the contrary, the admiration of particular

landscape features for their unique appeal had a long history in Japan's art and literature: It reached from the Heian court's writings to the Edo era's popular guidebooks and travel diaries which advised the country's itinerants (and its numerous armchair travellers) about the many famous *meisho* and *utamakura* that awaited them en route (Cwiertka and Yasuhara 2021: 51-59). Several decades later, the Meiji era's leadership was quick to realize the potential of these locations to raise their citizens' patriotic spirit and to promote the nation building process. Consequently, both governmental and non-governmental actors began to emphasize the unique Japanese character of the country's popular beauty spots, intrinsically turning any encounter with the aesthetic appeal of these sites into an experience of national pride (Shimazu 2011: 76). A prominent example of this could be seen during the Russo-Japanese War 1904-5, in the Hiroshima area: Prior to embarking on the passage to the continental warzone, Japan's soldiers were exhorted, if not simply ordered, by their superiors to visit Itsukushima Jinja on Miyajima, not only to show reverence at its shrine but also expressly so that Itsukushima's landscape, promoted as the essence of "Japanese beauty", would raise the soldiers' patriotic spirit (Shimazu 2011: 72-73).1

What marked each of Japan's many *meisho* was that their appeal was lodged within the framework of Japanese history and culture: Their designation as *meisho* relied either on the presence of a particular edifice at this location, on a reference to a particular historical event or person, or on a poetic allusion to the aesthetic appeal of this particular spot. A *meisho* without any historical or cultural point of reference was plain unimaginable, and within this mindset, landscapes without any such referential links simply did not deserve attention. (Cwiertka and Yasuhara 2021: 72)

In view of this, it becomes understandable what made *Nihon Fūkeiron* so appealing to its Meiji era audience. In his book, Shiga went expressly against the traditional concept of landscape appreciation. What he postulated was that Japan's true beauty was to be found in the regions beyond the sphere of human intervention, among the unadulterated landscapes where civilization had not been able to establish a foothold.

Still, Shiga knew better than to deviate too far from his readers' expectations. Following the conventions of *meisho* writing, Shiga adorned his landscape descriptions with numerous quotes from Japan's long history of poetry, but his use of poems differs from earlier landscape descriptions: His lyrical quotes serve as an auxiliary tool, an enhancement of a landscape's appeal, but they are not the primary reason for this landscape's purported charm. The true attraction of a landscape relies solely on its inherent aesthetic qualities. To describe these qualities, Shiga introduced three categories of aesthetic appreciation: *shōsha* – elegance, *bi* – beauty, and *tettō*, an unusual kanji combination which he employed to introduce European romanticism's concept of "the sublime" into his writing (Gavin 1999: 48; Wigen 2005: 12; Hamashita 2004: 5; Anzai 2009: 73 fn). But while the term as such may have been new to Shiga's readership, the emotion it referred to (in this case: allowing oneself to become overwhelmed by the sheer might of nature's unbridled energy) obviously struck a chord with them.

The impact of Shiga's book on Japan's youth was immediate. Inspired by his emotive landscape descriptions and encouraged by his instructions on how to organize for a hike the wilderness, countless budding outdoor enthusiasts took up mountain hiking as their pastime. More yet, with this book and the many other *fūkeiron* published in its wake, the idea of Japan's mountain ranges as the country's heartland and of their unique beauty, a beauty which no other country had to offer, became firmly lodged in Japan's public imagination.

The aftereffects of Shiga's writing still reverberate today. The idea of Japan's unique natural beauty and of the unique sensitivity of its inhabitants towards this beauty is a direct outcome of his writings, but as numerous contemporaries adopted and propagated this idea, it soon became dislodged from Shiga and his book, quickly slipping into the realm of popular knowledge so that today, hardly anyone is aware of the role that this Meiji nationalist played in establishing this ideology. The powerful marketing tool that today's *utsukushii Nippon* ideology represents, both in raising Japan's reputation internationally and in fostering local patriotism, is in many respects a direct offspring of the ideas that came out of Shiga's *Nihon Fūkeiron*. How his idea of a distinctive Japanese aesthetic inspired by the country's unique environment came to be utilized by Japan's governmental and non-governmental agencies over the last 150 years, and why this trope continues to strike an obvious nerve both inside and outside of the country is a research question that remains to be answered. With my research, I intend to work towards this answer.

Note

1) In spite of their widespread popularity, beauty spots such as Itsukushima were not the only landscapes that could be appreciated in the spirit of patriotism, as we can see for example in the Meiji emperor's preferences: As we know from the memoirs of his chamberlain, a sight that never failed to elate his spirits during his travels was the vista of Osaka's industrial zone, marked by the thick layer of smoke emanating from its many factories. (Keene 2002: 534)

Bibliography

Anzai, Shin'ichi. 2009. "Unmediated Nationalism: Science and Art in Shigetaka Shiga's *The Japanese Landscape* (1894)." *JTLA* 34: 65-81.

Cwiertka, Katarzyna J. and Yasuhara, Miko. 2021. *Branding Japanese Food: from meibutsu to washoku*. Paperback edition. Honolulu, HI: University of Hawai'i Press.

Gavin, Masako. 1999. *Shiga Shigetaka (1863 – 1927) : The Forgotten Enlightener.*
http://epublications.bond.edu.au/hss_pubs/235

Hamashita, Masahiro. 2004. "Shiga Shigetaka 'Nihon Fūkeiron' ni miru nihonteki sūkō no kanōsei: 'Tettō' sangaku keikō to kokusui." *Bungeigaku Kenkyū* 8: 1-25.

Keene, Donald. 2002. *Emperor of Japan: Meiji and His World, 1852 – 1912.*
New York, NY: Columbia University Press.

Shiga, Shigetaka. 1895. *Nihon Fūkeiron*. 3rd edition.
Tokyo: Seikyōsha.

Shimazu, Naoko. 2011. *Japanese Society at War: Death, Memory and the Russo-Japanese War.*
Cambridge: Cambridge University Press.

Wigen, Kären. 2005. "Discovering the Japanese Alps: Meiji Mountaineering and the Quest for Geographical Enlightenment." The Journal of Japanese Studies 31 (1) : 1-26.

特集

プロジェクト研究員の活動

Opportunity and Challenge for Asian Scholars in English-Language Academic Publishing: The Case of *Asian Ethnology*

Benjamin Dorman（人類学研究所）
Harmony DenRonden（人類学研究所）

For Asian scholars seeking publication in international English-language journals there is a dual narrative of opportunity and challenge. Successful publication can result in international peer recognition, but it could also mean obtaining funding and the ultimate goal of gaining employment. Some challenges Asian scholars face include linguistic barriers, theoretical and methodological divergences between Asia scholars and their Western-trained counterparts, and the financial constraints associated with publishing.

This report will examine this issue with reference to the case of *Asian Ethnology* in terms of four distinct periods of the journal's path over its 84-year history:

1. Its beginnings as *Folklore Studies* in 1942
2. The name change to *Asian Folklore Studies* in 1963
3. The death of the first editor, Mathias Eder, in 1980, and his successor, Peter Knecht's editorship until 2006
4. The name change to *Asian Ethnology* in 2008

First Period (1942–1964)

From 1942 to 1949, Mathias Eder ran the journal from Fu Jen University in Beijing, which was under Japanese rule at the time. The university was obliged to take a certain number of Japanese professors for their staff, some of whom contributed to the journal in the following years (Knecht and Dorman 2023a, 6). In 1949 Eder was forced to leave China and went to Japan, where he lived the rest of his life. From 1949 to 1963, Eder managed to continue publishing the journal despite newsprint shortages and issues with funding.

Second Period (1963–1980)

In the early 1960s, there was a burgeoning folklore movement in Asia. Richard M. Dorson, director of the Folklore Institute at Indiana University, recognized the need for greater communication among Asian folklorists. Supported by a Ford Foundation grant for international studies, the institute attracted numerous Asian scholars. This led to Dorson securing a five-year printing subvention for the journal *Asian Folklore Studies*, bolstering contributions from an array of scholars across Asia and the United States (Dorson 1963, 367–70).

Richard Dorson, once termed the "father of American folklore," significantly shaped *Asian Folklore Studies*. The Ford Foundation's funding and Dorson's initiatives not only revitalized the journal but also increased the participation of Asian scholars. A pivotal moment came in 1966 when Mathias Eder was encouraged to include works from Indiana University students, promising a consistent flow of articles with financial backing from the university for a decade (Knecht and Dorman 2023a, 8). When this funding ceased, Nanzan University assumed financial responsibility, ensuring the journal's continuation.

Peter Knecht, Eder's eventual successor, came to Japan in 1966 and later started his studies at the University of Tokyo in anthropology. He became involved in the journal writing book reviews, and Eder's idea was to introduce non-English publications to English speakers, initially Chinese works and later Japanese. Given the political situation in the late 1960s, it was not possible to obtain any material from China (Knecht and Dorman 2023b, 12). Some of the many reviews Knecht contributed to the journal were of Japanese scholarship, which highlights another important aspect of presenting the work of Asian scholars.

Third Period (1980–2006)

Eder passed away in 1980, Peter Knecht assumed the position of editor, which he held until 2006. While much could be written about Knecht's tenure, three significant factors stand out. Firstly, his idea—and, he believed, Eder's too—was that "the journal should be a place where scholars in Asia can publish their work in a language that is understood outside of their world" (Knecht and Dorman 2023b, 11–12). This is probably one of the unique aspects of the journal when it was *Folklore Studies* and *Asian Folklore Studies*. One of the most direct and obvious effects of this was that publication in the journal—which by that stage had been running for 40 years and was recognized internationally—advanced the careers of the contributors. Both Knecht and Dorman have experienced this. But the challenge, which Knecht elucidates by explaining the case of a famous Japanese professor, was to render the work of Asian scholars into English acceptable for an academic publication (Knecht and Dorman 2023b, 14).

This challenge is related to the second factor, namely, Nanzan University's decision to employ a native-English-speaking copy editor for the journals produced at separate institutes within Nanzan University, *Asian Folklore Studies* (at the Nanzan University, Anthropological Institute) and the *Japanese Journal of Religious Studies* (at the Nanzan Institute for Religion and Culture). The first copy editor, Michael Kelsey, was employed for several years and had some familiarity with publishing. That joint position shared between the institutes continued until 2017. The role of the copy editor, at least until 2008, was to not only copy edit and proofread the articles and the entire journal pre-publication, in many cases it also entailed developmental editing involving the work of Asian scholars.

The third factor was that Knecht introduced special issues based on a theme. Special issues have proven to be one of the longest-running and most consistent aspects of the journal in recent years, from *Asian Folklore Studies* to *Asian Ethnology*. In terms of bridging the gap between Asian scholars, or scholars trained

and based in Asia, and their Western-trained counterparts, special issues have provided a unique opportunity for guest editors. Many guest editors have been trained in Western methods and institutions, and they bring in their Asian colleagues, assuming the role of guiding and editing their work into a form acceptable to an international, English-speaking audience.

Fourth Period (2008–present)

The fourth and final period is from 2008 until the present day. First, the name change to *Asian Ethnology* in part reflected a concern of the then co-editors, Benjamin Dorman and Scott Schnell, that the journal clearly incorporated such fields as anthropology and Asian studies, not just folklore. "Ethnology," in their opinion, reflected this in a more cohesive way than "folklore." Dorman and Schnell both felt the need to introduce a double-blind peer review system, which is widespread in academic journals produced in Western academic contexts. This decision, while in line with the dominant Western paradigm, certainly affected the access for Asian scholars. Those who contributed to special issues received the guidance and support of guest editors, but those seeking individual submissions found it more challenging. The editors decided that having copy editors engage in developmental editing drained the resources of the journal, which are not unlimited. In order to counter that, the editors installed an international editorial board, scholars who were sympathetic to the journal's aims of incorporating the work of Asian scholars at the same time as producing a high-quality international journal with a double-blind peer review system.

Conclusion

Each period of the journal's development has been characterized by imbalances and compromises, and they all reflect the editors' unique backgrounds and views of the journal. During his tenure, Eder faced a number of challenges, including explusion from China and relocation to Japan and financial constraints, but also gained a boon for the journal through his relationship with Richard M. Dorson of Indiana University. During Knecht's tenure, he focused on maintaining Eder's legacy and desire to present the work of Asian scholars to the world, at the same time as developing a new path for the journal through the publication of special issues. Arguably the most significant change, in terms of publishing the work of Asian scholars, has come under the editorship of Dorman and Schnell, and then Dorman and Frank J. Korom. While it is arguably more challenging for individual Asian scholars to have their work published in the journal, those who are connected through fieldwork or other means to Western scholars find more opprtunites to pubish their work through special issues.

References

Dorson, Richard, M., compiler. 1963. "Notes on Asian Folklore." *Asian Folklore Studies* 22: 1–15.

Knecht, Peter, and Benjamin Dorman. 2023a. "The Beginnings of the Journal: From China to Japan." In *Asian Journeys: Conversations with Editors, Fieldworkers, and Scholars*, edited by Benjamin Dorman, 4–10. Nagoya: Nanzan University, Nanzan Anthropological Institute. https://asianethnology.org/manual_pdfs/AsianJourneysAE.pdf (original podcast interview https://asianethnology.org/page/podcastoneknecht)

———. 2023b. "The Beginnings of the Journal: Experiences as the Journal Editor." In *Asian Journeys: Conversations with Editors, Fieldworkers, and Scholars*, edited by Benjamin Dorman, 11–14. Nagoya: Nanzan University, Nanzan Anthropological Institute. https://asianethnology.org/manual_pdfs/AsianJourneysAE.pdf (original podcast interview https://asianethnology.org/page/podcasttwoknecht)

Book Reviews in *Asian Ethnology*: History and Development

Benjamin Dorman（人類学研究所）
Paul Capobianco（人類学研究所）

The purpose of this paper is to contribute to the general history of *Asian Ethnology*, with specific reference to the book reviews section. *Asian Ethnology* is now in its 84th year, and while there are many ways in which this history can be considered, the following focuses on book reviews and their development within the journal. In doing this, we will break down the history of book reviews in the journal into the four periods outlined in the previous essay by Dorman and DenRonden published with this issue.

Book and film reviews are an important and vital aspect of *Asian Ethnology*. Reviews can enhance the journal's reputation as a comprehensive academic resource, attract a wider readership, and foster an engaged academic community. They provide critical feedback to authors, increase visibility and academic impact, and can lead to subsequent citations and academic discussions. Publishers seeks reviews in journals to gain credibility and market their books to a targeted academic audience. For readers of the journal and the academic community in general, reviews keep scholars informed of new research and developments, supporting ongoing education and scholarly dialogue. They can also help in building a community of scholars who are regularly engaged with the journal. Finally, writing reviews can be one way for junior scholars to gain publication experience and raise awareness of their presence in the academic market.

While *Asian Ethnology* publishes book reviews from scholars worldwide, it focuses on scholars based in Asia, reflecting its aim to include perspectives from researchers outside the mainstream Western academic circles. This approach helps to diversify the academic dialogue by incorporating insights from a broader range of scholarly environments. This is especially true of non-native English-speaking scholars, who often find it difficult to publish in reputable journals.

The journal typically arranges its publications according to geographic focus, adhering to a traditional order from west to east, starting with China. This organizational method is a nod to the journal's historical beginnings in China before it relocated to its current headquarters in Japan. This sequence serves as a logistical tradition rather than a thematic statement.

Presently, *Asian Ethnology* does not accept unsolicited book reviews. The selection of books to review is managed by the book reviews editor with input from the editorial board. This method ensures that the reviews align with the journal's focus and maintain a consistent level of scholarly relevance and quality.

4 Periods

From its founding as *Folklore Studies* in China in 1942 to its renaming in 1963 to *Asian Folklore Studies* and then again in 2008 to

Asian Ethnology, the journal has gone through four specific periods in terms of book (and later, film) reviews.

First Period (1942 – 1964)

The first period of the journal as *Folklore Studies*, under founding editor Matthias Eder, lasted from 1942 until 1963. During this first period, under Matthias Eder, the journal moved from China to Japan in 1949 after the Chinese Revolution. Eder still managed to publish *Folklore Studies* in early years of postwar Japan, when paper was a precious commodity. The first book review was published in *Folklore Studies* 4 in 1952 by Eder himself. The next review appeared in 10 (1), written by the Austrian scholar Walther Heissig, who contributed a number of essays and reviews for the journal over many years. In the same issue and in 10 (2), Eder published English summaries of folkoristic or ethnological material published in Japanese journals. He continued this for a number of years. Eder was the sole reviewer for many issues, and the contents were mostly related to Japanese folklore, ethnology, and folktales – some of them related to Chinese subjects. Eder's final reviews for the journal under the name *Folklore Studies* (volume 21) included one for Richard M. Dorson's *Folklore Research Around the World.*

Second Period (1963–1980)

The second period, which began after the journal was renamed *Asian Folklore Studies*, lasted from 1963 until 1980, with Eder's death. The number of reviews in the journal began to increase from *Asian Folklore Studies* 23 (2). This was, in large part, due to the support from Indiana University through Richard M. Dorson, director of the Folklore Institute at Indiana University. As mentioned in Dorman and DenRonden, Dorson had a profound influence on the fortunes of the journal in the following years. He not only provided crucial financial support to the journal but also a number of contributors, who were either his students or contacts from various Asian countries. The number of contributions to the journal in general from young researchers related to Richard Dorson increased.

Peter Knecht, who was studying at the University of Tokyo, published his first review in 1969 in *Asian Folklore Studies* 28 (1), marking the start of a long period of contribution to book reviews that continues today. His latest review of a Japanese work was published in *Asian Ethnology* 83 (1). In total, Knecht contributed over 60 reviews to the journal of books written in a number of languages, including English, Japanese, and German.

Third period (1980–2006)

The third period lasted from 1980 until 2006 and covers the period that Peter Knecht was editor. During this period, the journal acquired the position of copy editor (shared with the Nanzan Institute for Religion and Culture). In many cases, the copyeditor also contributed book reviews to the journal. Michael Kelsey, the first official copy editor, had a background as a newspaper journalist and a background in folklore research, further expanding the field of review. The journal was thus further developed by an experienced and native editor. During his 26 years with the journal, Knecht contributed significantly to the development of reviews in the journal. He also requested reviews from researchers in a wide variety of fields. Knecht's commitment to the book reviews section is evident in the number

of contributions from various scholars, some of whom are still associated with the journal.

Fourth Period (2008–present)

The fourth period began in 2008 with the name change to *Asian Ethnology*. The name change was an acknowledgement of the past, in that the focus of Eder's work was originally ethnology, and a view to the future. The journal began a co-editor system with Benjamin Dorman (2008–present), Scott Schnell (2008–2011), and Frank Korom (2011–present), and with this came a double-blind peer review system that is standard in many international journals. In 2018, Paul Capobianco became the journal's first book reviews editor. The number of reviews published has increased and the content has expanded to include a wide range of Asian materials.

Recent Trends and Challenges

Since the COVID-19 pandemic, there have been some major changes to the academic publishing industry and overall publishing trends. First, the increased pressure for publishers to reduce costs and issue electronic books over hardcopies has made it more challenging to locate suitable reviewers willing to review books. Some publishers that we have worked closely with for years have suddenly dramatically reduced the number of hardcopies they are willing to send out for review. For many, reviewing digital copies of books is much more burdensome than reviewing a physical copy, which has led to some potential reviewers declining to review books.

Second, this has impacted the geographic distribution of our reviewers. For example, one major US publisher has refused to send hard copies of books outside of the US. This has had an impact on our reviewer distribution because prospective reviewers outside the US are less likely to review digital copies.

Third, the decreased availability of hardcopies has impacted the pool of potential reviewers we can access. Junior scholars and scholars outside mainstream Western academic who need English language publications are often more willing to accept digital copies of books, which has changed the balance we previously had in terms of distribution.

Finally, the challenges of the pandemic resulted in a backlog of work for many academics. After committing to review books for the journal, a surprisingly large number of reviewers never submitted their reviews. This is unfortunate, but it is the reality of the pandemic and its impact on academic publishing. It appears that many intriguing books we found reviewers for will ultimately go unreviewed.

Final Thoughts

The reviews in *Asian Ethnology* have become an integral and vital part of the journal for many years, and this will continue. We will continue to provide a platform for scholars from diverse geographies and at all levels of their careers. Our commitment to providing a reputable and supportive platform for Asia scholars is unwavering, and we look forward to continuing to publish interesting reviews.

特集

沼澤喜市資料整理プロジェクト報告（2023年度）

加藤 英明（人類学研究所）

本報告は、2023年度における沼澤資料の整理作業と、今後着目する研究テーマのひとつを紹介する。

2023年度の整理作業は、2022年度に続き、宮脇千絵第一種研究所員のもと、プロジェクト研究員である加藤と人類文化学科の学生3名および人間文化研究科の大学院生2名により進められ、現在まで、資料の入った封筒497点のうち、全体の 3分の 1 にあたる封筒148点のスキャンが完了した。作業においては、収蔵庫に保管している①「現物資料」と、その内容を記載した②「目録」、スキャンした③「PDFデータ」の 3 つの情報が、きちんと結びついているかをチェックしながら進めている。この作業を続けていき、利用者が問題なく使用できるデジタルアーカイブの実現を達成したいと考えている。またそのほかに、南山アーカイブズに沼澤喜一資料の一部（ボックスファイル 3箱、ただし目録リストなし）が保管されていることがわかった。経緯は不明だが 2014年の南山アーカイブズ開設時に同機関が引き取った資料で、FW 資料や研究資料、原稿、手紙など、大学・教育・研究関連からなる資料内容となっている。引き続き同機関で保管してもらうことになった。

次に、沼澤資料のなかで今後着目するテーマのひとつとして、南山大学の東ニューギニア学術調査団による地元名古屋へのアウトリーチを紹介する。とくに中部日本新聞（現中日新聞）から、調査団の第1回目の調査（1964年8月～ 12月）に関する記事を抜粋し（注1）、昭和30年代にさかんにおこなわれた「海外学術エクスペディション」の特徴を調査団がもっていたことを確認する。

エクスペディションは、第2次世界大戦後に、植民地や占領地などの調査地を失った日本の文化人類学者たちが、フィールドで一次資料を手に入れるために活用した手段になる。その実態を詳細に検討した飯田（2007）によると、その特徴は、マスメディアから資金提供や広報などの後援を受け調査が組織された点にあるという。映画カメラマンや新聞記者が調査に同行し、珍しい文化を伝えるために、新聞紙面に現地の情報を速報し、調査後には長編映画、書籍出版、新聞社が主催する展示会や講演会を開催し同時多発的に広報を展開する。当時は、一般的に海外渡航が難しかったため、マスメディアは研究者に取材の意義を代弁してもらい、研究者はマスメディアから資金提供してもらうという双方向的な関係が成立した。その結果、学術とマスメディアが結びつき、学術活動の広範なアウトリーチが生みだされた。

南山大学の東ニューギニア学術調査団は、このエクスペディションの特徴を有しており、文部省から科学研究費の提供を受ける一方で、マスメディアの後援のもと計画・立案された調査といえる。とくに、同時期のエクスペディションの場合、朝日新聞や讀賣新聞、毎日新聞など大手新聞社が積極的に関わっていたのに対して、東ニューギニア学術調査団の場合、中部日本新聞や東海テレビなど、地元名古屋のマスメディアが後援した点に特徴がある。調査には、沼澤喜一団長含む研究者6名のほかに、マスメディアから佐野桂次（中部日本新聞社社会部員）、稲川利昭や小林敏勇（東海テレビ報道部員）ら3名が調

査に同行した。以下に中部日本新聞の記事を参考に（表）、調査団と新聞社による地元名古屋へのアウトリーチを確認する。

はじめに、1964年7月15日と8月1日の記事から、調査前に結団式と壮行会を開催したことが確認できる。たとえば、結団式では、同調査団を後援する中部日本新聞や東海テレビ、松坂屋、愛知県、名古屋市から協賛金の贈呈があり、また壮行会では、東海テレビが30分にわたって生放送し、地元政、財界、マスメディアの後押しと期待のもと調査に送り出されたことがわかる。

次に現地調査では、同行した中部日本新聞社の佐野桂次が、頻繁ではないがいくつかの小さな記事をリアルタイムであげている。9月1日の記事では、沼澤喜一氏ら先発隊より遅れて出発した4団員が合流したことや、9月26日の記事では、調査団の目的のひとつである戦没慰霊法要（注2）をラエの飛行場の東側に臨時の祭壇を設けておこなったことが報告されている。さらに佐野桂次は、各地で拾った話題を4回にわたり、サンデー版に大きなカラー写真とともに報告している。豊作を祈って開催されるシンシンまつり、ピグミー部落における生活の一コマ、危険地域でのパトロールの実態、戦跡地のひとつで、ラエの海岸に沈んだ日本の輸送船に関する記事をのせている。最後に、12月17日の記事では、学術的な成果をタイムリーなかたちで報告している。打製石器から磨製石器への移行状況、旧石器前期の礫器が見つかったこと、貝輪のかけらの発見から文化伝達ルートを想定できるなどの可能性が期待を込めたかたちで書かれている。本格的な分析に入る前に今後の展望を可能性あるものとして速報しており、調査団の社会的成果を強調する記事といえる。

以上、調査に同行した佐野桂次の報告も含め、調査をリアルタイムで紙面に載せる当時のようすから、調査団の学術的・社会的意義が速報され、中部日本新聞社と連携するかたちで地元名古屋へのアウトリーチが実現していることがわかる。さらに、調査後には沼澤喜一氏自身も新聞記事の連載をいくつかもつようになる（注3）。今後、どのように沼澤喜一氏がローカルな知識人としての顔をみせるようになったのか、調べていきたいと考える。

註

1）記事の選定は、クネヒト・ペトロ氏の論文「南山大学による「東ニューギニア学術調査団」の行動と成果の回顧」の註に記載された情報をもとにピックアップした。

2）沼澤喜一資料（袋番号347）には、戦没者の遺族から調査団宛に送られた手紙の空封筒のみ少しだけ残されており、調査団が担っていた学術以外の目的の一端をみてとれる。

3）中日新聞「ともしび　人生のページ」（1967年-1969年）、中日新聞「人生教室（1968年-1970年）、中日新聞「私のニューギニア・ノート」（1967年-1968年）など。

参照文献

飯田卓 2007「昭和30年代の海外学術エクスペディション：「日本の人類学」の戦後とマスメディア」『国立民族学博物館研究報告』31（2）：227-285。
クネヒト・ペトロ 1998「南山大学による「東ニューギニア学術調査団」の行動と成果の回顧」『アカデミア（人文・社会科学編）』67: 83-108。

表 東ニューギニア学術調査団に関わる記事（中部日本新聞）

日付	新聞記事タイトル	記者
1964年7月15日　夕刊	南山大学東ニューギニア調査の結団式	不明
1964年8月1日　夕刊	盛大に壮行会開く　東ニューギニア学術調査団	不明
1964年9月1日　夕刊	現地で先発隊と合流	佐野桂次
1964年9月26日　夕刊	ラエで戦没者慰霊法要	佐野桂次
1964年11月1日　サンデー版	シンシンまつり	佐野桂次
1964年11月8日　サンデー版	ピグミー部落	佐野桂次
1964年11月22日　サンデー版	現地人の警察官	佐野桂次
1964年11月29日　サンデー版	戦跡地ラエ	佐野桂次
1964年12月17日　朝刊	東ニューギニア貴重な遺跡発掘に成功	不明

特集

国際化推進事業報告

2023年度公開シンポジウムと南方科技大学への出張報告

張雅（人類学研究所）

南山大学人類学研究所国際化推進事業（第5期）は、第3期の「在地的人類学に向けたアジア人類学者ネットワーク構築」と第4期の「自然災害と共に生きるための知恵」を引き継いで、「なりわいと移動の人類学：中華圏の研究者との協同から」という主題でスタートを切った。

私は担当研究員として、2023年に「海を越えて南洋に渡った人たちの体験—戦争とジェンダーの視点から」というシンポジウムを企画した。今までは、占領地へ派遣された女性作家の南洋体験の特徴と位相を歴史上の事象として考察してきたが、長期化しているロシアのウクライナの侵略、家を追われたガザ地区住民の避難生活などのニュースに触れ、過去の過ちを繰り返しつつある人間の歴史の積み重ねをリアルタイムで追いながら、その犠牲となり不安定な日常を強いられた無防備の人間の無力を痛感せずにはいられなかった。第三次世界大戦の危機が高まる中で、戦争の影に生きさせられた人々の物語を共有することが一層重要となるというと思いを新たにした。そのため、南山大学人類学研究所国際化推進事業を通して、これまで語られてこなかった歴史を多くの人々に伝えることを目的とし、戦時中に南洋に渡った人たちの戦争体験に関するシンポジウムを企画した。本シンポジウムは、帝国日本の周縁に位置付けられた南洋という地域に視点を据え置き、戦争とジェンダーの関係性の観点から国策の動員体制による戦時・戦後における人の移動に注目し、戦争体験をめぐって、日本人移民や軍属、徴用作家らなどの体験がいかにジェンダー化されたのかを考察した。2023年3月3日に沖縄国際大学の川島淳氏と東京大学の大久保由理氏を南山大学にお招きして、対面・Zoom のハイブリッド方式で開催した。当日のオンラインでは 41名、対面14名の参加者があった。

最初の登壇者の川島淳氏は、戦時中の南洋群島における引揚政策が性別役割分業に基づき、男性を戦場に居残らせて戦士として戦わせていたのに対して、非戦闘員である女性と子供が戦時引揚の対象者にされていたことを検証した。大久保由理氏のご発表では、拓南塾の一期生として卒業後に倉敷紡績の社員としてフィリピンに赴いた伊藤敏夫の未公刊の日誌の日記を中心に、フィリピンで棉花の栽培事業に携わると同時に、軍の占領に協力するよう現地住民を宣撫する活動も行われたことを考察した。私は 1940年代に南洋に派遣された作家らを中心に、南洋で兵士たちの慰問、学校の見学などの活動にも取り組んだ女性作家に求められた役割を解明した。登壇者のご報告後、ベトナム文化人類学の研究専門家である宮沢千尋氏から、「移民史研究」や「東南アジア地域研究」、文学研究などの領域から幅広く交差する本シンポジウムの問題意識とそこから複雑に絡み合ったジェンダー関係の再編の視点を抽出していただき、南洋に渡って沖縄出身の移住者は現地の人々の生活や文化がどのように見ていたのか、そして南洋の体験が彼らのその後の人生でどのように回想し影響を与えたのかなどいつくかの論点が指摘された。また、「民族衣装」の流通と消費について研究されてきた宮脇千絵氏からは、報告者の発表では多角的な視点からの南

洋における日本人女性像が描かれていることを指摘され、日本人占領者らが技術交流、生産の面から現地の経済にどのような影響をもたらしたのかという問題提起がなされた。今回のシンポジウムは帝国日本が戦争に突入する際に、どのようなジェンダー戦略により国民を南洋に動員し、非常時における占領地南洋での性別役割分担がどのように南洋を渡った人たちの経験に影響を与えていたのかを考察したことで、参加者から多くの関心が寄せられ、活発な議論も交わされた。

また、2023年12月13日−16日に南方科技大学の王暁葵氏を訪問し、来年度に予定する国際シンポジウムについて打ち合わせを行った。王暁葵氏に南山大学人類学研究所の出版物を贈呈し、王暁葵氏からも社会科学高等研究院の出版物をご恵贈いただいた。12月に名古屋はすでに冬の寒さがスタートしていたが、滞在中の深圳はまだ気温が高く気持ち良い湿り気が感じられていた。南方科技大学は周辺の高層ビルに囲まれながら、キャンパス内に広々に緑葉が青々と茂っている。人文社会科学学院は古色の建築物で構成されており、なかの嶺南建築の回廊を潜ると、静寂な庭園があり、人文知を育む環境が備えられていることを実感していた。滞在中に同大学の張靜紅氏のご厚意を賜り、授業を傍聴させていただいた。張靜紅氏は「若者の文化的雑食の消費行動から見る無形文化遺産の継承――潮州の事例から」を題として、街頭インタビューと、知り合いの案内で自宅に訪問すること、予約と案内なしで手当たり次第に自宅でのインタビューの可否を確認する、という三つの調査方法を紹介し、その中でカメラの介入によって、インタビューされた人の反応も大きく相違するという現象から「刺激物としてのカメラ」の機能を解説した。自宅で上の世代と若い世代が共に「工夫茶」の飲用を通じて意見を交わす機会を設けたことで、世代の壁を取り払う効果もあったという。また、新式の茶館を消費する若者も増加する傾向も見られている。彼らは茶館を利用することを通して、茶文化の芸術性が感じられ、伝統文化に回帰する動態を呈しているのである。以上の張靜紅氏のお茶に関する研究についての話を興味深く拝聴したことで、後日南山大学でご講演いただくことを打診した。滞在中に社会科学高等研究院のスタッフから、社会科学高等研究院にある考古展示室と南方科技大学の歴史館をご案内いただいた。考古展示室には中国の20地域と10ヵ国以上の考古研究院などから5万片以上の陶磁器の標本が寄付されており、中国初となる考古陶磁器標本データベースの構築と共有を貢献している。

末筆ながら、2023年度の国内シンポジウムの開催に当たってご報告を快諾していただく川島先生と大久保由理氏、また国際シンポジウムの企画から多大なご協力をいただいた南方科技大学の王暁葵氏と張靜紅氏に厚くお礼申し上げたい。

食堂の朝ご飯

キャンパス

活動報告【2023 年度】

シンポジウム

第1回 公開シンポジウム「ワリ帝国を掘る」

日時　2023年6月28日(水) 14：00 ～ 17：00
会場　南山大学 Q103教室・オンライン（Zoom）
主催　南山大学人類学研究所
共催　文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)「古代アンデスのワリ帝国 の社会構成と地方社会の実態」、文部科学省科学研究費補助金 新学術領域「出ユーラシア」A03班
プログラム
「Los animales sagrados en Wari: representaciones simbólicas desde la cosmovisión andina（ワリにおける聖なる動物：アンデスの世界観における象徴の表象）」Martha Cabrera Romero マルタ・カブレラ・ロメロ（ペルー国立ワマンガ大学）
「Nuevos aportes acerca del primer imperio andino: Wari（アンデスの初期帝国についての新発見：ワリ）」José Ochatoma Paravicino ホセ・オチャトマ・パラビシノ（ペルー国立ワマンガ大学）
日本語通訳・解説　渡部森哉（人類学研究所・所長）
質疑応答
司会　渡部森哉

今回、6月30日から7月2日に開催された、文部科学省科学研究費補助金 新学術領域「出ユーラシア」の国際シンポジウムに参加するためにペルーから来日した2人の研究者をお招きして公開シンポジウムを開催した。文部科学省科学研究費補助金 新学術領域「出ユーラシア」A03班が共催となっている。

マルタ・カブレラ氏は、ワリ遺跡、および近隣のコンチョパタ遺跡から出土した遺物、特に土器に表現された動物図像の分析を行った。アンデスの宇宙観では、世界を天、地上、地下の3つの面に分類する。図像に表現されたそれぞれの動物を3つの面のいずれかに分類してその役割を考察した。

ホセ・オチャトマ氏は、ワリ遺跡の発掘の詳細について説明した。ベガチャヨフ・モホ、モンハチャユフ、カピリャパタ、セロ・サン・クリストバル、チュパパタの5つの地区での発掘のデータに基づき、ワリ遺跡における儀礼の実態について説明した。また、ワリの人々が地方の人々を捕縛したことを示した図像表現があるという解釈を提示した。

ワリ研究の最も豊かなデータに基づく、極めて刺激的なシンポジウムであった。　（文責：渡部森哉）

第2回公開シンポジウム
「葬式はどこから来てどこへ行くのか」
（南山大学研究所連携公開シンポジウム）

日時	2023年10月8日(日) 14：00～17：00
会場	南山大学 Q103教室
主催	南山大学人類学研究所・南山大学社会倫理研究所
使用言語	日本語
プログラム	趣旨説明　渡部森哉(人類学研究所・所長) 報告1「ポストコロナ時代における葬送儀礼の形」辻本耐(自治医科大学) 報告2「きたない死、きれいな死：葬儀業の職能実践にみる死穢観念の現代的様相」田中大介(神奈川大学) 「コメント」石原美奈子(人類学研究所・第二種研究所員)・西本優樹(南山大学社会倫理研究所) 質疑応答
司会	渡部森哉

人類学研究所と社会倫理研究所の共同企画として実施された。

社会倫理研究所のプロジェクト研究員の辻本氏が現役の僧侶であり研究者という立場から、葬式の歴史と現状について解説した。人類学者の田中氏は、葬儀会社でフィールドワークを行い、博士論文を執筆した。葬式を人類学的に議論する際にどのような視点があるか、そして研究がどのように推移してきたか、研究史を踏まえ現状について解説した。葬儀業の視点に立脚し、死穢観念、職業意識を本質的に捉えるのではなく、常に変化している実態を直視する重要性が指摘された。

コメンテーターの西本氏は元警察官として勤務し、東日本大震災の際に現地において死者をどのように扱ったかという視点などからコメントした。石原氏は人類学者という立場、また学生を指導する立場からいくつかコメントをした。

今回のシンポジウムは、多くの関心を呼び、開催前から多くの問い合わせがあった。また当日は、学内の多くの学部の教員や事務職員が参加した。葬式が現代的に極めて重要なテーマであることは浮き彫りになった。簡単には一般化できないのが葬式のあり方であり、常に変化している実態が浮かび上がった。そうした葬式の動態を他の要素と組み合わせながらパターンを抽出していくことが今後の作業の1つとなろう。　（文責：渡部森哉）

第3回公開シンポジウム
「王崧興『亀山島』と漢人社会研究」

日時　2023年12月26日(火) 10:00 ～ 12:45
会場　南山大学 G27教室・オンライン（Zoom）
主催　南山大学人類学研究所
共催　東アジア人類学研究会
使用言語　日本語
プログラム
10:00 開会の辞　渡部森哉(人類学研究所・所長)
第一部『亀山島』を読む
10:05「趣旨説明：あらためて『亀山島』を読むために」川瀬由高(江戸川大学)
10:10「台湾の人類学と「自文化」研究」
呉松旆(関西学院大学)
10:20「亀山島と「漢人らしさ」研究」
稲澤努(尚絅学院大学)
10:30「女性の仕事と島の外に広がる世界」
藤川美代子(南山大学)
10:40「複雑で名づけすら困難な人間関係」
長沼さやか（静岡大学）
10:50「『亀山島』と「関係あり、組織なし」」
川瀬由高
(休憩)
第二部 コメント
11:15 太田出(京都大学)
11:30 長津一史(東洋大学)
11:45 上水流 久彦(県立広島大学)
12:00 リプライ&質疑応答

当日は、生前の王崧興氏と親交のあった方々や若手の研究者など、多くの来場者があった。報告者による発表につづき、コメンテータ各位からは次のような問題提起があった。

太田氏からは『亀山島』の編訳者たちに対して、今後は海洋学・水産学・環境学・国際政治・歴史学・社会学などとの連携を図ることで、新たな亀山島研究、もしくは台湾離島研究へと展開する可能性があるとのコメントがあった。また、王氏も編訳者も触れなかった点として、『台湾日日新報』の記事を用いて、日本統治時代の亀山島島民の生活や外の世界に対する考え方の一端についての紹介があった。

長津氏によると、海民の特徴として離散移住傾向の強さ、商業志向の卓越、ネットワーク中心の社会関係などが挙げられる。また、インドネシアのバジャウと呼ばれる海民の社会では、カリスマと追随者の服従、家族は集団ではなくある種の「圏」であるという顕著な特徴があり、これらは亀山島における「頭人（タウラン）」という固定化されないリーダーシップのあり方、（多くの漢人社会では集団としての「宗族」が際立つのに対して）「関係あり、組織なし」という人間関係のあり方と比較する際の軸になり得るのではないかとの問題提起があった。

上水流氏からは、漢人社会の特徴を捉えるものとして王氏が打ち出した「関係あり、組織なし」という概念において、「個人」とは何を指すのか、それは『亀山島』で言及される「個人主義的志向」と「共同性志向」という二つの概念といかに関わるのかとの問題提起がなされた。

最後には、亀山島出身で現在は亀山島社区発展協会・理事長を務める簡英俊氏より、フィールドワーク中の王氏の思い出や、『亀山島』の翻訳書に寄せる思いについてお話があった。（文責：藤川美代子）

第4回公開シンポジウム
「海を越えて南洋に渡った人たちの体験 ―戦争とジェンダーの視点から―」
（国際化推進事業関連企画）

日時　2024年3月3日（日）13:30 ～ 17:30
会場　南山大学 G25教室・オンライン（Zoom）
主催　南山大学人類学研究所
プログラム
13:30 開会挨拶
13:35~13:45 「趣旨説明」張雅（人類学研究所・非常勤研究員）
13:50~14:30 「沖縄出身南洋移民女性の生業と戦争ージェンダーの視点から―」川島淳（沖縄国際大学・非常勤講師）
14:35~15:15 「フィリピンで「大東亜共栄圏」建設を目指した青年：ジェンダーの視点から日記を読み直す」大久保由理（東京大学・特任研究員）
15:20~16:00 「1940年代に南洋へ赴く男性作家と女性作家の役割について」張雅（人類学研究所・非常勤研究員）
16:15~16:30 「コメント」宮沢千尋（人類文化学科・教授）
16:30~16:45 「コメント」宮脇千絵（人類学研究所・第一種研究所員）
16:45~17:30 質疑応答
17:30 閉会挨拶

このシンポジウムは南山大学人類学研究所の国際化推進事業の一環として、企画されたものである。

川島淳氏の報告では、戦時中の総動員体制という非常時の際には、南洋群島における引揚政策も性別役割分業に基づき、男性は南洋群島に残留し戦争遂行の協力に動員されたのに対して、女性や子供などは非戦力人員として引揚対象者とされていたことが明らかにされた。

大久保由理氏の発表では、「拓南塾」の一期生としてフィリピンに派遣された伊藤敏夫の現地での綿作事業を携わる際に求められた役割は「軍政への協力」と「住民宣撫」であったことが指摘された。しかし、「拓南塾」で他民族を指導する理想の日本人像を抱いていた伊藤敏夫は現地で慰安所に通い性病を患った同僚ばかりを見て、理想と現実の齟齬から生じた釈然としない思いを抱くようになった。

張雅氏は1940年代に南洋に派遣された作家らを中心に、派遣の時期、期間、活動などの面から、男性作家と女性作家に求められたそれぞれの役割の相違を解明した。戦時中の日本政府は、準兵隊として前線で戦争を記録する男性作家の役割と、知的な日本女性として占領地を見学する女性作家というように性別で役割を分けて任務を果たさせようとしていたのである。

登壇者の報告後、宮沢千尋氏から、南洋に渡って「異文化体験」をしたことがこれらの移民、軍属、作家らのその後の人生にどのような影響を与えたのかという問題提起がなされた。また、宮脇千絵氏からは、日本人占領者らは現地の地域社会の経済活動といかに関わっていたのかという問題提起があった。

本シンポジウムは帝国日本史、東南アジア研究史など幅広い視点から議論が行われ、研究者同士の交流も深まり、大変有意義で充実なしたシンポジウムとなった。（文責：張雅）

公開講演会

第1回公開講演会
「真実をあぶりだす技法：エチオピア南東部アルシ社会の慣習法廷における宣誓の役割」

日時	2023年9月17日(日) 14：00 ～ 16：00
会場	南山大学 S46教室・オンライン（Zoom）
主催	南山大学人類学研究所
講師	大場千景(アルシ大学・助教／大阪公立大学・客員研究員)
コメンテーター	石原美奈子(人類学研究所・第二種研究所員)
司会	宮脇千絵(人類学研究所・第一種研究所員)
プログラム	14:00~14:05　「挨拶」宮脇千絵
	14:05~15:10　「真実をあぶりだす技法：エチオピア南東部アルシ社会の慣習法廷における宣誓の役割」大場千景
	15:10~15:25　「コメント」石原美奈子
	15:25~15:35　休憩
	15:35~16:00　質疑応答

エチオピア・アルシ大学で教鞭を取る大場氏にご講演いただいた。アルシ社会独自の慣習法について、法ごとの罰則の特徴、独特な裁定様式などが紹介され、彼らがいかに係争を調停し、和解へと導くのかが具体的な事例とともに考察された。映像資料も交えながら、長きにわたり現地社会に密着して調査を行ってきた大場氏の臨場感ある発表に引き込まれた。

その後、同じくエチオピアをフィールドとする石原氏からイスラームやキリスト教とガダ組織の関係や、都市部と農村との違いなどに関して質問・コメントが行われた。参加者は対面、オンラインを合わせて15名であった。（文責：宮脇千絵）

第2回公開講演会

「仮面が空から降ってきた…：太平洋戦争時のプロパガンダ機関 FELO に対するオーストラリア人類学の協力」

日時　2023年11月10日(金) 17：30 ～ 19：45
会場　南山大学宗教文化研究所 / 人類学研究所217会議室・オンライン（Zoom）
主催　南山大学人類学研究所
講師　小坂恵敬(人類学研究所・非常勤研究員)
司会　渡部森哉(人類学研究所・所長)
使用言語　日本語
プログラム
17:30~17:35　「挨拶」　渡部森哉
17:35~19:05　「仮面が空から降ってきた…：太平洋戦争時のプロパガンダ機関 FELO に対するオーストラリア人類学の協力」小坂恵敬(人類学研究所・非常勤研究員)
19:05~19:15　「コメント」中生勝美(桜美林大学・教授)
19:15~19:45　ディスカッション

本研究所・非常勤研究員の小坂氏に研究発表をおこなっていただいた。前半では人類学がいかに戦争に協力してきたのかを米国、英国、日本、豪州それぞれの違いが説明された。その上で、FELO(Far Eastern Liaison Office・極東連絡局）と人類学者の関係を事例に、ニューギニア戦で空から撒かれた現地民向けの宣伝ビラについて紹介、分析がおこなわれた。宣伝ビラの図案そのものもたいへん興味深く、今後の更なる研究が期待される。

その後中生氏から、人類学者の戦争協力に関してオーストラリアの蓄積が少ないため貴重な研究である等のコメントがおこなわれた。発表者の小坂氏がオーストラリアからのオンライン発表であったこともあり対面参加者は少なかったが、オンラインと合わせて 33名の参加があり、質疑応答もおこなわれた。

（文責：宮脇千絵）

第3回公開講演会

Maya in the Age of the Cross: from colonial missions to modern shamanic performance

日時　2024年3月19日(火) 15：00 ～ 17：00
会場　南山大学宗教文化研究所 / 人類学研究所217会議室・オンライン（Zoom）
主催　南山大学人類学研究所
講師　William F. Hanks (University of California, Berkeley)
司会　渡部森哉(人類学研究所・所長)
使用言語　日本語
プログラム
15：00　講演と質疑応答
17：00　終了

ウィリアム・ハンクス教授はマヤ地域北部においてフィールドワークを行い、多くの著作を発表してきた著名な人類学者である。今回の講演会では、現在進行している研究の一部を紹介した。

中南米地域の人びとの多くはカトリックである。16世紀から布教が始まり、そのために先住民は新たに設置された集住村に住まわされた。集住村で先住民に布教するために辞書が編纂された。そうした過程をへてできあがったユカテク語（マヤ語の1つ）とスペイン語の辞書を検討すると、植民地時代の先住民言語の変容が読み取れる。現在のシャーマンが儀礼において語る言葉を分析すると、マヤ語ではあるが植民地時代に変容した結果であることが分かる。

出席者からは宗教学の視点からなど多くの質問が寄せられた。ハンクス先生が現在の研究をまとめて発表するのを楽しみにしたい。（文責：渡部森哉）

映画上映会

第1回映画上映会
「Hosay Trinidad（1998）25周年上映会」

日時	2023年10月20日(金) 17:00 ～ 19:00
会場	南山大学 S48教室
主催	南山大学人類学研究所
使用言語	英語
プログラム	17:00~17:05 Introduction（Benjamin Dorman: 人類学研究所・第一種研究所員） 17:05~17:50 Hosay Trinidad 上映（言語：英語音声、日本語字幕付き） 17:50~17:55 Break time 17:55~18:20 映画 "Hosay Trinidad" の解説、最近のトリニーダ島に関する報告（Frank J. Korom：ボストン大学） 18:20~19:00 Q&A
司会	Benjamin Dorman

今回のイベントは、映画『ホセイ・トリニダード』の公開25周年を記念したものであり、この映画の監督であるボストン大学のフランク・コロム先生をお招きし上映会及び講演会を開催した。

この映画は、スミソニアン協会の民族プログラム事務局からのサポートを受け、1993年から1996年にかけて、映画製作者であるジョン・ビショップとともにこの映画を編集し1998年に公開された。1999年にはUCLAのVITAS民族誌映画祭で上映賞を受賞し、2003年には書籍『Hosay Trinidad』が出版され、イタリアでPremio Pitrè賞を受賞した。

日本語字幕付きでの上映後に、コロム先生からトリニーダ島における、シーア派のムッハラムの儀式について、ホセイの当時のメンバーや、後継者となったジャミールを通しての儀式の実態や変遷についての講演があった。質疑応答では、この儀式は、信仰なのか、それともお祭りなのか?コロナ禍後にどのような変化があったのか?タジャを海に沈める儀式は日本の風習とも似ている。など参加者と講演者とのやり取りも非常に有意義かつ刺激的なものであった。

参加者：13名　　（文責：Dorman,Benjamin）

人類学フェスティバル

人類学フェスティバル 2023

日時　2024年1月28日(日) 11:00~15:00

会場　南山大学 R 棟1階(ホワイエ、応接室、会議室)

主催　南山大学人類学研究所

共催　南山大学人文学部人類文化学科・外国語学部アジア学科

1. 学生の研究発表

参加：藤川美代子ゼミ、宮沢千尋ゼミ、上峯篤史ゼミ（以上、南山大学人文学部人類文化学科）、張玉玲ゼミ（南山大学外国語学部アジア学科）、岡部真由美ゼミ（中京大学現代社会学部）、東賢太朗ゼミ（名古屋大学文学部）、二文字屋脩ゼミ（愛知淑徳大学交流文化学部）

会場：R 棟1階　ホワイエ

2.「海辺の町に生きる―静岡県下田市の人・文化・歴史」

2023年度フィールドワーク（文化人類学）

I1受講生

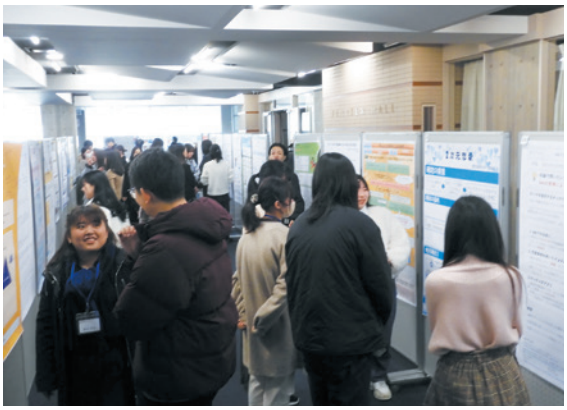
◆展示

(1) ポスターによる調査報告

(2) 下田あしあと日記(地図による当日の活動記録)

(3) ミニ水族館

(4) その他展示



3.「在日インド人ともの」
2023年度フィールドワーク（文化人類学）
I2受講生

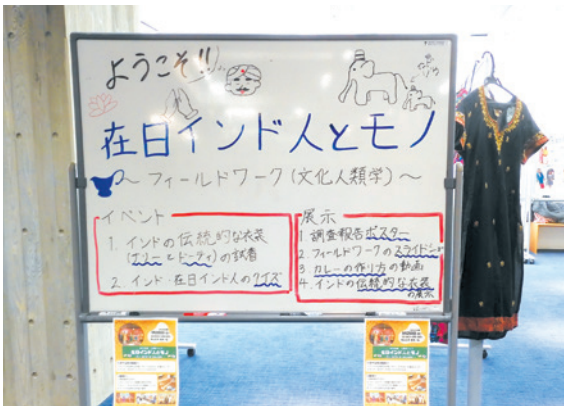
◆イベント
(1) インドの伝統的な衣装（サリーと Dhoti）を着るコーナー
(2) インド・在日インド人についてのクイズ
◆展示
(1) 調査報告（ポスター）
(2) フィールドワーク調査の様子
(3) カレー・チャイの作り方の動画・レシピ
(4) インド伝統衣装

南山大学人文学部人類文化学科、外国語学部アジア学科をはじめ中京大学現代社会学部、名古屋大学文学部、愛知淑徳大学交流文化学部からポスター発表を61名の学部生、院生がおこなった。3部に分けたコアタイムでは、それぞれの発表者が来場者に向けて研究内容をプレゼンし、活発に意見交換する様子が見られた。

フィールドワーク授業の成果としても２つの企画発表がおこなわれた。「海辺の町に生きる―静岡県下田市の人・文化・歴史」ではテーマごとに掘り下げたポスター掲示、魚の絵を使用したプラバン作りコーナーなどが設けられた。「在日インド人ともの」は、サリーやドーティの試着やクイズコーナーで盛り上がった。

終了後は校内食堂で懇親会をおこない、ここでも学部や大学の境界を越えた交流が見られた。コロナ禍による人数制限がなくなった本年は、外部からの来客者もあって大変な賑わいとなった。

（文責：宮脇千絵）



参加学生によるコメント

藤川ゼミ（人文学部人類文化学科）

今回人類学フェスに参加したことで、自分が何をテーマに卒業論文を書きたいのか明確にすることができました。ポスターを製作したり、口頭で説明したりしたことで、それまでに調査して得た情報を整理することができましたし、普段接する機会の少ない人から意見や質問を得たり、他の学生の発表やポスター展示を見たりしたことで、自分の視野を広げることができました。また、発表を見に来てくれた学生と、書籍や論文の情報だけでなく、お互いのテーマに関連する研究をしている友人を紹介しあうなど、人の繋がりが新たに生まれる様子を感じることができました。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

（小島遥・3年）

張ゼミ（外国語学部アジア学科）

人類学フェスに参加し、他ゼミや他大学の学生から意見を貰えたことは、新しい角度から自身の卒業論文について考え直すいい機会となった。ポスター発表の際には、テーマや内容を客観的に見直すことができ、多くの感想、意見を他学生から得る中で、新たに取り組みたい論点や問題点に対しての改善策を見つけることができた。また、同じような興味関心を持つ人、同じ人類学でもまるで異なるトピックをテーマにしている人の発表を聞く機会を得られたことは、今後の論文作成への刺激となった。それぞれの研究がこれからどう深まっていくのか非常に楽しみに感じたと同時に、今後どこかのタイミングで、意見や成果を共有できるような機会があればと思う。

（宮島千寿加・3年）

今回のポスター発表を通して感じたこととしまして、様々な発表から自分の研究に活かせるような内容はもちろんたくさんありましたが、何より感じたことは時代の流れとともに研究のブームが変わることです。「推し」についての研究が学部のみならず博士前期でも研究され、「ゲーム」を通して何かの要素を見つける研究やSNSについての研究もありました。これはやはり私たちの世代とは違い、小学校時代からインターネットに触れ、学校のみならずSNSを通してコミュニケーションを取り、コミュニティを形成していった結果だと考えることもできます。こう言った要素は今後の研究にも大きな影響を与える可能性があり、人を対象とする研究においては特に重視すべき分野になると感じました。

（朱瀚・M1）

岡部ゼミ（中京大学現代社会学部）

人類学フェスに参加して、皆さんが問いに対してどんな方法で調査しているのかが分かりました。登山に関する調査をしていた他大学の学生さんは、白山信仰など歴史を調べており、私も登山が大衆化した歴史について文献調査をしようと思いました。

ポスター発表でプレゼンをする際、質疑応答を設ける学生が多く、私はポスターの内容だけでなく、登山についての質問をしました。まさかこんな会話ができるとは思ってなかったのですが、登山についての知識を深めることが出来、同じ趣味の人との交流まで経験出来、とてもいい機会だったと実感しています。私のポスターに対してのコメントで、「この山なら企業と協同しているから、卒論の幅が広がるかも知れない」と、新たな視点を頂きました。

また、全体のポスターを見て、タイプとして同じ系統の話題でも、色々な問いを立てることができるのだと思い、とても興味深く感じました。

（神保陽菜・3年）

人類学フェスで自分のポスター発表やたくさんの学生の発表を通して、これからの卒論制作に活か

せる多様な視点での考え方を得ることができました。特に自分の発表の時に話を聞きに来てくれて、「ここが分かりやすくて良かった!」「このテーマだったら参考になりそうなこんな論文があるよ!」「調査を行う時に対象を分けて考えたらもっと良くなると思う!」といったような意見をもらうことができ、自分だけで思いつかなかったことにも気づくことができました。今までに色々な人に自分の発表を聞いてもらえたり、他大学の学生と交流する機会はあまりなかったので、新しい経験になりました。休憩時間には、在日インド人と学生によるインドのクイズにも参加して伝統衣装のサリーが長くて大きい布一枚で着ていることを初めて知りました。（新美友香･3年）

二文字屋ゼミ（愛知淑徳大学交流文化学部）

私は人類学フェスでのポスター発表を通して、客観的に自分の発表を見つめ直すことができました。他大学で自分と似たような研究をしている人と意見を交換し合ったり、アドバイスも頂けたりしたので、とても貴重な時間を過ごすことができました。また、これからの課題やまだ調べきれてない部分も沢山も見つかったので、文献調査やインタビュー調査を進めてこれからの研究に活かしたいと思います。（藁科凛・3年）

人類学フェスでのポスター発表を通して、自分は何を知りたいのか、どう研究を進めていきたいのかが明らかになりました。私自身、今回のイベント開催前までは、自分の研究テーマに対して曖昧な部分があり 、不安な気持ちを抱えていましたが、研究に使える本の紹介や、今後の進め方に対してのアドバイスをしていただいたことで、自分の中で整理ができました。また、他大学の方の発表を聞き、こんな考え方もあるのだと刺激を受け、とても有意義な時間になりました。（時田怜奈･3年）

東ゼミ（名古屋大学文学部）

私は昨年も人類学フェスティバルでポスターの発表を行いましたが、今年も発表の場をいただいて、昨年のポスターの段階から、調査や考察を行って卒業論文として書き上げた研究について発表をすることができました。私にとっても集大成の一つとなりましたし、私と同じ分野に取り組んでいる方などがコアタイムに話を聞きに来てくださって嬉しかったです。今年は私を含めて学部の 4年生や院生の発表もあったので、それらがこれから卒業論文に取り組んでいく方たちの、これからの道筋のイメージや、研究の何らかの参考になればと思います。

また、今年度のポスターも面白い着眼点のテーマがたくさんあり、とても興味深く見させてもらいました。自分の初めて知る分野や、自分には無い視点での研究もあれば、自分ととても身近なテーマのものもあり、これらの多様性に文化人類学という学問、そしてこういった交流会の面白さを改めて感じました。コアタイムでは何人かの方と直接質問や議論などもできて、より理解を深めることができました。全体的に去年より他の大学の人の発表を聞きに行ったり、イベントに参加したりといった交流が増えていたようにも感じました。

フェスが終わった後は懇親会にも参加させていただきました。人数も多かったのでお話しできたのは一握りでしたが、先の時間ではお話しできなかった人ともお話ができて、懇親会も含めてとても良い時間になりました。

最後になりましたが、今年もこのフェスに参加させていただき、発表の場を設けていただくとともに、貴重な他の大学の人との交流機会を得ることができました。ありがとうございました。（山﨑久美子・4年）

様々な学科の方の研究テーマを垣間見ることができ、非常に新鮮でした。普段、自専攻の人としか交流しないため、井戸の外を知った蛙の気分です。はじめは特に興味を持っていなかった研究でもコアタイ

ムの発表を聞いているうちに「僕もこの研究しようかな……」と思わされたり、「むむ、やけに解像度が高いな?」と思ったら修士二年の方のポスターだったりと、大所帯のフェスを存分に楽しむことができました。僕は怪談についてのポスターを作製したのですが、興味を持って色々質問してくださる方もいて、なんだか認められた気分になりました。これから卒論に向けて積み上げを行っていくモチベーションがぐぐっと高まりました。頑張れそうです。海辺の町やインドに関する展示も魅力的で、キーホルダー制作や伝統的な衣装の着付けの体験も人類学的な興味をそそりました。展示内容には実際に現地に行くことでしか手に入らない情報が溢れていて、僕も人類学で修士を目指す以上、出不精は克服する必要があるなと感じました。　（栗木謙成・3年）

「海辺の町に生きる」フィールドワーク

人類学フェスでは、自分の明るくない分野であっても、発表者の丁寧な解説により新しい知識を得ることができました。また、テーマに関連する事柄についてその発表者との談話も行えて、楽しく有意義な時間を過ごせました。私自身も下田でのフィールドワークについてポスターを製作し、その内容を他の参加者の方に説明しました。私が強く興味を惹かれたり面白いと感じた事柄を、そのままに相手に伝えることは思ったよりも難しく、自分の力量不足を感じましたが、そういった点も含めて良い経験ができました。他大学や他学科の方とはあまり交流する機会がないため、このような機会に恵まれたことを嬉しく思います。人文学部生として、今後とも広く物事に関心を向け、知見を深めていきたいです。　（一柳いづは・2年）

共催企画

シンポジウム

「ミュージアムと『民族衣装』」（民族藝術学会第39回大会）

日時　2023年4月22日(水) 13：45 ～ 16：35
会場　南山大学 G30教室・オンライン（Zoom）
主催　民族藝術学会
共催　南山大学人類学研究所
プログラム
13:45~14:50　「趣旨説明」　宮脇千絵(南山大学)
13:50~14:15　「ファッション展と民族衣装－アメリカの　ミュージアムを中心に」　平芳裕子(神戸大学)
14:15~14:40　「断片化する民族衣装：収集から展示までの過程に着目して」　佐藤若菜(京都女子大学)
14:50~15:15　「文化学園服飾博物館における『民族衣装』の展示」　村上佳代(文化学園服飾博物館)
15:15~15:40　「衣の民具とキュレーション－展示における自己と他者」　加藤幸治(武蔵野美術大学)
15:40~15:55　「コメント」　杉本星子(京都文教大学)
16:05~16:35　討論

民族藝術学会第39回大会を南山大学で開催するのに伴い、学会内シンポジウムを人類学研究所で共催するかたちとした。「ミュージアムと「民族衣装」」をテーマに、分野の異なる発表者を4名、コメンテーターを1名お迎えした。

平芳裕子氏は、20世紀初頭のアメリカの博物館や美術館でのファッション展において「民族衣装」が参照されてきたこと、それが20世紀後半におけるファッション展の発展に寄与したことを報告した。佐藤若菜氏は、中国の少数民族ミャオ族を事例に、博物館に展示される衣装が収集されるプロセスについて自身のフィールドワークの成果も交えて報告した。村上佳代氏は、文化学園服飾博物館のキュレーターという立場から、同館の「民族衣装」コレクションと展示の際のアプローチ法や工夫を報告した。加藤幸治氏は、民具のキュレーションの経験を踏まえ、衣服展示の際にいかに着ることのアクチュアリティを保持できるかの関し報告をおこなった。コメンテーターの杉本星子氏からは、「衣装」の展示情報空間を縦軸に、「民族」衣装の生成を横軸にした表を用いた分析が提示された。

当日は対面参加の民族藝術学会員に加え、非学会員にもオンラインから多く参加いただいた。時間が足りずディスカッションを十分におこなうことができなかったが、参加者からいただいたコメントを活かし、今後に繋げていきたい。　（文責：宮脇千絵）

研究大会

東アジア人類学研究会20周年記念大会

日時　2023年12月26日(火) 14：15 ～ 17：20
　　27日(水) 9：30 ～ 16：30
会場　12月26日:南山大学 G27教室・オンライン (Zoom)
　　12月27日:南山学園研修センター大ホール、第4会議室
主催　東アジア人類学研究会
共催　南山大学人類学研究所、人間文化研究機構「海域アジア・オセアニア」研究事業
プログラム
【12月26日】
14:15~14:20　開会の辞：渡邊欣雄(東京都立大学名誉教授)
20周年記念シンポジウム「東アジア人類学のこれからを考える」
(司会：稲澤努&河合洋尚)
<第I部問題提起>14:20~16:00
趣旨説明：河合洋尚(東京都立大学)
パネリスト1　藤野陽平(北海道大学)
パネリスト2　奈良雅史(国立民族学博物館)
パネリスト3　小林宏至(山口大学)
パネリスト4　宮脇千絵(南山大学)
パネリスト5　櫻田涼子(育英短期大学)
<第II部コメント&議論>16:10~17:20
コメンテーター：加賀谷真梨(新潟大学)
　　諸昭喜(国立民族学博物館)
　　神野知恵(国立民族学博物館)

【2日目2023年12月27日(水)】

午前の部

－A 会場(第4会議室)－

研究動向紹介(1)(9:30~10:15)

・9:30~9:45 「櫻井想2023『天津の鬼市：路上古物市場をめぐる〈空間〉と〈場所〉の人類学』風響社」 渡邊泰輔(東京都立大学大学院)

・9:45~10:00 「G. マシューズ 2021『チョンキンマンション：世界の真ん中にあるゲットーの人類学』青土社」 神宮寺航一(東京都立大学大学院)

・10:00~10:15 「ノエル・キャロル(高田敦史訳)2022(1990)『ホラーの哲学：フィクションと感情をめぐるパラドックス』フィルムアート社」 于嘯(山口大学大学院)

個人発表(1)(10:20~11:50)

・10:20~11:05 「人口減等により消滅した集落での信仰に関する事物への人々の対応と意識」 花野千尋(新潟大学大学院)

コメンテーター：藤川美代子(南山大学)

・11:05~11:50 「生成する寺院空間―南タイの仏教聖者ルアンプートゥアッドと少年霊アイカイを事例として」 宮本皓平(慶應義塾大学大学院)

コメンテーター：岡部真由美(中京大学)

－B 会場(大ホール)－

研究動向紹介(2)(9:30~10:15)

・9:30~9:45 「金露2016『遺産・旅游・現代性：黔中布依族生態博物館的人類学研究』浙江大学出版社」 曾力(山口大学大学院)

・9:45~10:00 「張平平2023『チベット高原に花咲く糞文化』春風社」 張平平(北九州市立大学)

・10:00~10:15 「泉水英計編著2022『近代国家と植民地性：アジア太平洋地域の歴史的展開』御茶ノ水書房」 山内健治(明治大学)

個人発表(2)(10:20-11:50) 司会：戴寧

・10:20~11:05 「タイ族の伝統的なイレズミ」における集合的記憶：中国雲南省徳宏州タイ族を中心として」 刀保媛(南山大学大学院)

コメンテーター：張平平(北九州市立大学)

・11:05~11:50 「集団主義と個人主義：中国貴州省におけるトン族の「いろり空間」の変遷」 侯建衛(東京都立大学大学院)

コメンテーター：川瀬由高(江戸川大学)

27日午後の部

－A 会場(中会議室)－

個人発表(3)(13:00~15:40)

・13:00~13:45 「戦後沖縄の「終わらない闘争」に関する聞き取り調査」 永尾陽(明治大学大学院)

コメンテーター：西川慧(石巻専修大学)

・13:45~14:30 「SNS の時代における少数民族観光：中国貴州省西江千戸苗寨を実例―」 呉佳穎(北海道大学大学院)

コメンテーター：横田浩一(人間文化研究機構・東京都市大学)

《休憩15分》

・14:45~15:30 「棒球」文化から「台湾」を見る：台湾野球に関する文化人類学的研究」 三井柚奈(南山大学大学院)

コメンテーター：河合洋尚(東京都立大学)

－B 会場(大会議室)－

個人発表(4)(13:00~16:15)

・13:00~13:45 「持続可能な観光の考察：バリ島プンリプラン村を事例として考える」 野口真花(南山大学大学院)

コメンテーター：櫻田涼子(育英短期大学)

・13:45~14:30 「地域社会における外国につながる人々のインクルージョンと夜間中学に関する考察」 新井真帆(慶應義塾大学大学院)

コメンテーター：戴寧(東京都立大学)

《休憩15分》

・14:45~15:30 「誰」がアイヌ文化を観光に活用するのか――阿寒湖アイヌコタンの木彫り作家から考える観光実践の担い手の差異」 山本高之(南山大学大学院)

コメンテーター：奈良雅史(国立民族学博物館)

・15:30~16:15 「民俗知識のアナログ的可能性：音律・風水・親族を手掛かりに」 小林宏至(山口大学)

コメンテーター：山内健治(明治大学)

・閉会の辞：稲澤努

東アジア人類学研究会の20周年記念大会が人類学研究所との共催で、南山大学で2日間にわたって開催された。

1日目は南山大学において20周年記念シンポジウム「東アジア人類学のこれからを考える」がハイブリッドで開催された。「いま東アジア人類学にどういう課題があるのか」という河合氏の趣旨説明による問いかけに対し、中国とイスラームの交叉(奈良氏)、服飾の脱地域的な流通や消費(宮脇氏)、サイバー空間の生成と境界性(藤野氏)、移民やオンラインなどのマルチサイト民族誌(小林氏)、華僑華人研究の再考(櫻田氏)など、5名のパネリストが東アジア研究を越えた東アジア人類学の構築に関し発表をおこなった。その後、沖縄の事例から(加賀谷氏)、韓国・台湾の事例から(諸氏)、韓国・日本の事例から(神野氏)のコメントが寄せられた。

2日目は会場を南山学園研修センターに移し、1日

かけて17名の研究動向発表・個人研究発表がおこなわれた。若手を含めた意欲的な研究発表のひとつひとつにコメンテーターもつき、各回活発な議論が交わされた。

東アジア人類学研究会の大会を南山大学で開催するのは2015年以来8年ぶり2度目であったが、全国各地から多くの人が集まり、充実した議論をおこなうことができた2日間であった。　（文責：宮脇千絵）

講演会&コンサート

「ユネスコ無形文化遺産・南音と古琴の世界を訪ねる」

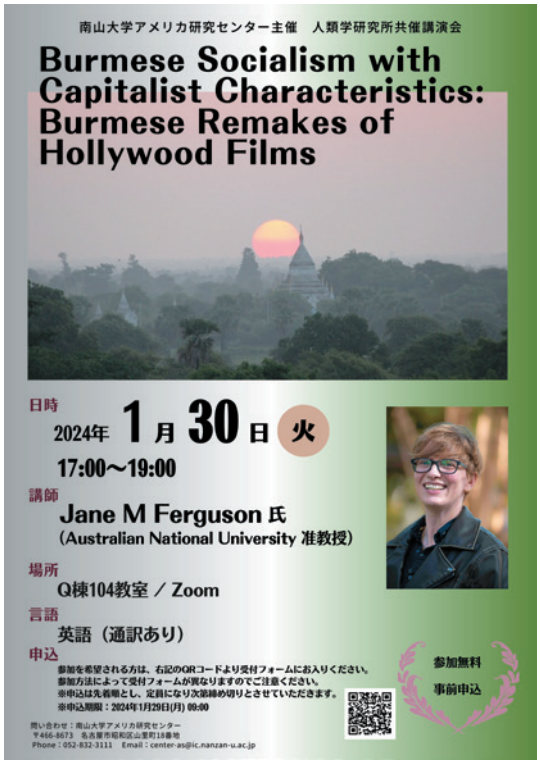
日時　2024年1月28日(日) 15：30 ～ 17：00
会場　南山大学フラッテンホール
主催　外国語学部アジア学科
共催　南山大学人類学研究所
講師　蔡雅藝、陳思来(通訳) 王維(長崎大学多文化社会学部・教授)
プログラム　15: 30：開会挨拶
中裕史(外国語学部アジア学科・教授)
15：35：講演・演奏　蔡雅藝、陳思来
16：45：質疑応答
17：00：閉会
(司会進行：張玉玲(人類学研究所・第二種研究所員))
演奏曲
・瀟湘水雲(古琴)　陳思来
・霏霏颯颯(南音)　蔡雅藝(琵琶&歌)・陳思来(洞蕭)
・流水(古琴と南音) 陳思来(古琴) 蔡雅藝(洞蕭)
・四宝(打楽器) と琵琶

1月28日にR棟フラッテンホールで、外国語学部アジア学科主催、人類学研究所共催の講演会&コンサート「ユネスコ無形文化遺産 南音と古琴の世界を訪ねる」が開催された。南音と古琴は、長い歴史を持つ漢民族の代表的な音楽であり、2009年にユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録された。約210名の参加者は、国際的に活躍されている南音伝承者の蔡雅藝氏、古琴奏者の陳思来氏が奏でる中国音楽の美しい音色を楽しんでいた。

質疑応答の時間に、特に「四宝」の様々な音の奏で方について掘り下げた質問がなされた。「四宝」は竹でできた南音の打楽器で、繊細な音から力強い音、震えるような細かな音も奏でられていた。右下の写真で中央の蔡氏が演奏しているのが「四宝」である。　（文責：張玉玲）

講演会

「Burmese Socialism with Capitalist Characteristics : Burmese Remakes of Hollywood Films」



日時	2024年1月30日(火) 17：30 ～ 19：00
会場	南山大学 Q104教室・オンライン（Zoom）
主催	南山大学アメリカ研究センター
共催	南山大学人類学研究所
プログラム	Jane M Ferguson (Australian National University・准教授)

Attendance: 15 people in person, 21 on Zoom; total 36

This talk outlined how, despite the frequent characterization of media production during the Ne Win era (1962-1988) being stifled by both the nationalization of the economy as well as the government's draconian censorship regime, films produced during this so-called "Burmese Way to Socialism" period are hardly bereft of international references, fashions and cosmopolitan cachet.

The year of Ne Win's military coup, 1962 also signified the apex of Burmese film production, with 92 feature films released to cinema halls that year. Whereas the Revolutionary Council and Burmese Socialist Program Party governments oversaw both a tighter economic management and ideological constraints on film production, the motion picture industry continued to make popular films.

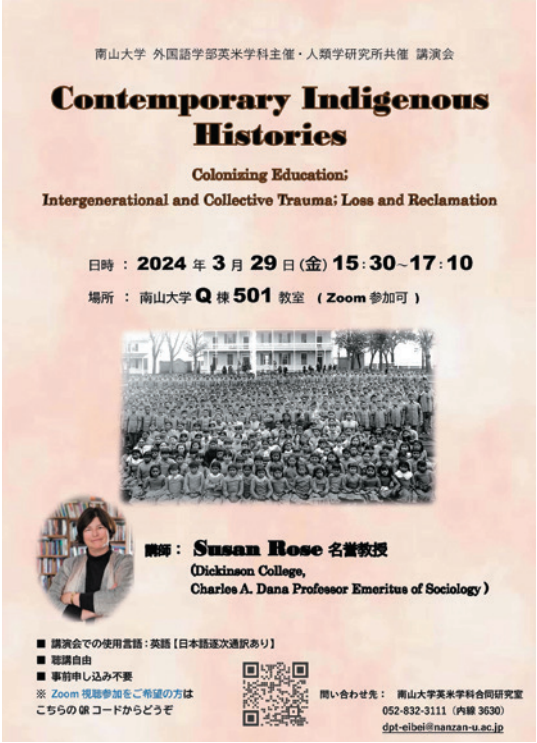
A significant number of these films were remakes of Hollywood films; previous stories are translated and modified to fit with the Burmese context, as well as made appropriate to the imperatives of the government censor board. The talk focused on some of the ways in which the film industry, despite its cosmopolitan aura, followed selected aspects of the Burmese Way to Socialism.

Their were a number of questions from the floor about Burmese history, media history, and cultural production.

（文責：Dorman, Benjamin）

講演会

「Contemporary Indigenous Histories Colonizing Education; Intergenerational and Collective Trauma; Loss and Reclamation」



日時　2024年3月29日(金) 15：30 ～ 17：10
会場　南山大学 Q501教室・オンライン（Zoom）
主催　南山大学外国語学部英米学科
共催　南山大学人類学研究所
プログラム　Susan Rose (Dickinson College, Charles A. Dana Professor Emeritus of Sociology・名誉教授)

Attendance: 15 in person, 7 on Zoom; total 22
The talk focused on the story of Settler Colonialism, which encroached not only upon the lands of Native American Indians but also on the minds and souls of children. This story is about an experiment in education for extinction, a story of intergenerational and collective trauma - profound and enduring trauma that continues to affect American Indian communities and people today. Finally, it is an American story - and one that speaks of the genocidal foundations of U.S. society.
Professor Rose focused on the Carlisle Indian Industrial School, which was the first federally funded, off-reservation boarding school and it became the model for other Indian boarding schools across the U.S. and Canada. She showed a trailer to the film The Lost Ones, which contains the stories of two indigenous children who were taken from their tribe and raised at the Carlisle Indian Industrial School. Professor Rose discussed how their descendents are coming to terms with the legacy of this history.
This talk elicited a number of questions about the specific history or the Carlisle Indian Industrial School and intergenerational trauma in general. Professor Rose discussed how the legacy of colonization has affected many societies, and raised the cases of New Zealand and Australia in particular.

（文責：Dorman, Benjamin）

共同研究

人類学研究所共同研究
「装いの境界領域に関する人類学的研究」
（2022~2024年度）

［代表］宮脇千絵（人類学研究所・第一種研究所員）

本研究会は、国家や民族、伝統、ジェンダーなどによって規定されてきた装いの境界の揺らぎとその再構築がいかなるものなのかを、中国・台湾の事例を中心に検討するものである。中国･台湾においては、特に2000年代以降、急激に進む都市化や観光開発、文化遺産登録の動向に伴い、各民族の伝統的衣装が文化資源として再評価されており、民族集団の境界線と装いの差異を一致させることが迫られている。しかし一方で、民族歌舞団のパフォーマンス、民族ファッションショー、観光地やSNSといった文脈で披露・共有される衣装は、一見特定の民族集団と結びついているようで、その差異が不明瞭であることが少なくない。つまり素材や技法、デザインが大幅に改変され、視覚的に担保されるエスニック性が曖昧になっているのである。本研究会はこの曖昧さを装いの境界領域ととらえ、その内実を明らかにすることを目的としている。

2023年度の研究会では、佐藤氏が中国国内で民族衣装をリデザイン（改変）する動きが活発化してきたことを発表した。ミャオ族を事例に、衣装の一部を切り取り他の製品へ展開したり、衣装のモチーフや形をプリント化したりするなどの事例が報告された。研究会は一度のみの開催となったが、2024年3月末に非公式にZoomで打ち合わせを行い、2024年度の成果公開に向けての確認を行った。

第1回研究会

日時　2023年8月7日（月）14:00～17:00（Zoom）
発表　佐藤若菜（京都女子大学）「保存から商品開発へ：中国における文化資源としての民族衣装」
総合討論　全員

人類学研究所共同研究
「デジタル化が生み出す新たな生／知のあり方―記録・身体・モノ―」（2022~2024年度）

［代表］加藤英明・菅沼文乃・高村美也子
（以上、人類学研究所・プロジェクト研究員）

［とりまとめ］石原美奈子（人類学研究所・第二種研究所員）

本共同研究は、デジタル化をめぐり、新たな人間や社会のあり方がいかに生じているのか、記憶、身体、モノの観点から検討する内容となっている。2年目にあたる2023年度は、3回の研究会をハイブリッドで実施し、6名が発表した。

第1回目の研究会では、加藤がデジタルプログラムを成立させるために生じる町工場の技術的実践を紹介した。また野澤はバリ島の儀礼歌を事例に身体伝承とオンラインによる新たな発信について映像を交えながら紹介した。第2回目の研究会では、髙村が、東アフリカのモバイルマネーの活用を紹介し、特に銀行口座、身分証明書をもたない人々でも利用できる実態を報告した。後藤がミクロネシア・ナンマトル遺跡の事例から、遺跡測量技術LiDAR法の試行錯誤の事例を紹介した。第3回目の研究会では、菅沼がデジタルツールを利用した高齢者見守りの事例について、そこに潜む課題をデジタルディバイドへの対応と「みる／みられる」の構図から整理した。平田は、自らの育児経験からデジタル機器を育児のエージェントとして考え、協働的な育児・家事の指向性を明らかにした。

本年度の研究会を通して、各地域の事例からデジタル化により合理化が進行するわけではなく、その背後に人びとの生と知のあり方がさまざまなかたちであらわれている実態を確認できた。今後の課題としては、身体やモノ、記憶の枠組みで検討できるかどうか、今一度考える必要がある。引き続き議論を重ねて、論集の刊行を目指していきたい。

第1回研究会

日時　2023年10月29日(日) 14:00～16:00
会場　南山大学人類学研究所1階会議室・オンライン(Zoom)
発表①　加藤英明(南山大学)「NC工作機械をめぐる町工場の人びとの技法とネットワーク」
発表②　野澤暁子(名古屋大学)「バリ島の儀礼歌の伝承状況：儀礼実践とオンライン動画との比較から」

第2回研究会

日時　2023年12月2日(土) 13:00～15:00
会場　南山大学人類学研究所1階会議室・オンライン(Zoom)
発表①　髙村美也子(南山大学)「東アフリカにおけるモバイルマネーの実践」
発表②　後藤明(南山大学)「レーザーを用いた遺跡測量技術LiDAR法の現状：ミクロネシア・ナンマトル遺跡と佐賀県吉野ヶ里遺跡の事例から」

第3回研究会

日時　2024年3月16日(土) 13:00～15:00
会場　南山大学人類学研究所2階会議室・オンライン(Zoom)
発表①　菅沼文乃(南山大学)「沖縄県中山間地域における高齢者みまもりとデジタル技術の活用について」
発表②　平田晶子(東洋大学)「多様な「働く女性」や共働き世帯を支える育児IoT空間デザインをめぐる人類学的研究」

研究業績

第一種研究所員

DORMAN, Benjamin

論文

"The Abe Assassination, the Unification Church, and the Media: A Brief Overview," *Japanese Religions* 45 (1&2) :103-116.

編著

"Editor's Introduction". *Asian Journeys* (e-book) . Nanzan University Anthropological Institute pp.1-3. https://asianethnology.org/pages/asian-journey.

学会発表

"Creating Communities of Care." Presentation at Anthropologists of Japan in Japan Annual Conference, 2 December 2023.

寄稿

「オーストラリアの人類学関係の学会組織・雑誌・成果・傾向」『人類学研究所通信』23:16-17。

Dorman, Benjamin, and Frank J. Korom "Editors' Note," *Asian Ethnology* 82 (1) :1-2.

宮脇千絵

論文

「プリント化・手仕事化するスカート−中国モン（ミャオ族）衣装のオーセンティシティ獲得のプロセス」『文化人類学』88 (3) :523-542。

「特集 ミュージアムと「民族衣装」序」『民族藝術学会誌 arts/』40:7-31。

学会発表

「趣旨説明　ミュージアムと「民族衣装」」民族藝術学会第39回大会シンポジウム、南山大学、2023年4月22日。

研究会・シンポジウム報告

「少数民族の装い研究から」東アジア人類学研究会20周年記念シンポジウム「東アジア人類学の今後を考える」、南山大学、2023年12月26日。

講演

「中国少数民族の装いにみる伝統とファッション」明治大学大学院情報コミュニケーション研究科 2023年度情報コミュニケーション研究科特別講義、明治大学、2023年12月21日。

その他

南山宗教文化研究所講演会「LA MANDALA 描画の周辺——ロサンゼルスの現代美術家／絵仏師の視点」、南山大学、2023年11月23日、コメンテーター。

「はじめに」南山大学人類学研究所（編）『じんるいけん Booklet 2023 Vol.9『後藤明の研究の歩みと四人の巨人』（公開シンポジウム（後藤明教授退職記念）講演録』、pp. i - ii。

南山大学人類学研究所公開シンポジウム「海を越えて南洋に渡った人たちの体験−戦争とジェンダーの視点から−（国際化推進事業関連企画）」、南山大学、2024年3月3日、コメンテーター。

プロジェクト研究員

髙村美也子

寄稿

「タンザニアにおける人類学研究の状況」『人類学研究所通信』23:11-12。

研究会・シンポジウム報告

「東アフリカにおけるモバイルマネーの実践」人類学研究所共同研究「デジタル化が生み出す新たな生 / 知のあり方—記録・身体・モノ—」第2回研究会、

南山大学人類学研究所（Zoom）、2023年12月2日。

竹内愛

投稿論文

「ネパール、ジラバワニ市のタルー女性にとってのエンパワメントとは - 女性自助組織『ハミ・ディティ・バヒニ・サムハ』を事例として」『共生の文化研究』（18）:79-98。

寄稿

「ネパールにおける人類学関係の学術雑誌、学会活動」『人類学研究所通信』23：14-15

学会発表

「ネパールにおける障害者女性の自立支援の実態と課題－ネパール南東部パルサ地区ジラバワニ市のNGOの活動事例から－」（ポスター発表）、障害学会第20回大会 、東京大学駒場第2キャンパス、2023年9月16日。

「ネワール民族の農民カースト女性の集合的エンパワメントのあり方：ネパール、旧王都パタンの女性自助組織の活動事例から－」（口頭発表）、日本南アジア学会第36回全国大会、神戸大学六甲台第1キャンパス、2023年9月23日。

研究会・シンポジウム報告

「ネパールにおける国際的な出稼ぎと女性自助組織ミサ・プツァのコミュニティ内役割」愛知県立大学多文化共生研究所 公開研究会 、愛知県立大学長久手キャンパス、2024年1月23日。

講演

「ジェンダーと災害の民族誌－変容する農民カーストとネワール社会」学術講演会、椙山女学園大学 国際コミュニケーション学棟、2023年5月26日。

「卒業生の話を聞く会：ネパールでのフィールドワーク体験」、愛知淑徳中学校、2024年2月8日。

報告文

竹内愛・亀井伸孝（共著）

「公開研究会『ネパールにおける国際的な出稼ぎと女性自助組織ミサ・プツァのコミュニティ内役割』開催報告」『共生の文化研究』（18）:205−206。

菅沼文乃

講演

「それぞれ老いる、それぞれ生きる 沖縄都市部の一人暮らし老年者の老いを考える」慶應義塾大学文学部総合教育科目「孤独と共生I」、慶應義塾大学、2023年5月2日。

「辻遊郭について：その特徴と現在 沖縄フィールドワークノートから」美術文化史研究会金曜文化教室、名古屋市公会堂、2023年8月25日。

書評

「書評・宮岡真央子・渋谷努・中村八重・兼城糸絵（編著）『日本で学ぶ文化人相学』」
『年報人類学研究』14：34−36。

加藤英明

論文

「町工場の人びとの道具:工具･治具･測定具を「使いこなす」技法を事例に」『民具マンスリー』56（6）:1-10。

「「仕事場」からみる町工場のライフヒストリー：西三河地域に展開するもうひとつのモノづくり」『日本オーラル・ヒストリー研究』19: 109-129。

単著

『ひとつとして同じモノがない:トヨタとともに生きる「単品モノ」町工場の民族誌』、春風社。

研究会・シンポジウム報告

「自書を語る：『ひとつとして同じモノがない――トヨタとともに生きる「単品モノ」町工場の民族誌』春風社」第8回 まるはち人類学研究会（「特別企画：北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）の大学院生・若手研究者との交流セミナー」）、オンライン、2024年3月4日。

科学研究費助成事業（2023年度採択課題）

氏名		採択課題	
渡部森哉	基盤研究（A）	古代アンデスのワリ帝国の社会構成と地方社会の実態	新規
石原美奈子	基盤研究（B）	エチオピアにおける郷土史・地方史の体系的収集・分析を通した多元的歴史認識の解明	継続
川浦佐知子	基礎研究（C）	合衆国西部の水利権係争に働く部族主権の検討：モンタナ州水利権合意に焦点をあてて	継続
吉田竹也	基盤研究（C）	バリと沖縄の楽園観光地に生きる観光サバルタンの事例考察を通した観光リスク論の探究	継続
中尾央	基盤研究（C）	戦争と道徳性の進化に関する自然哲学的考察	継続
張玉玲	基盤研究（C）	福建省福清出身華人の移住および同郷紐帯の拡大と文化的・社会的制度としての「故郷」	継続
藤川美代子	若手研究	海洋生物の捕獲と養殖をめぐる文化人類学的研究：中国・台湾・フィリピンの事例から	継続
宮脇千絵	若手研究	現代中国における少数民族女性の稼得労働とエスニシティに関する人類学的研究	継続
竹内愛	若手研究	ネパールにおける女性の集合的エンパワーメントの比較研究―州レベルにおける多様性	継続
加藤英明	若手研究	機械の保全をめぐる人類学的研究：トヨタの保全の人々の技法と共同性を事例に	新規
中尾央	新学術領域研究（研究領域提案型）	三次元データベースと数理解析・モデル構築による分野統合的研究の促進	継続
加藤英明	研究成果公開促進費（学術図書）	「ひとつとして同じモノがない：トヨタとともに生きる「単品モノ」町工場の民族誌」	新規

刊行物
【2023年度】

刊行物

人類学研究所(編)	『年報人類学研究』第14号(2023年6月30日発行)
人類学研究所(編)	Asian Ethnology, Volume 82, Number 1 (2023年7月31日発行)
人類学研究所(編)	Asian Ethnology, Volume 82, Number 2 (2024年2月14日発行)
人類学研究所(編)	『人類学研究所通信』第23号(2023年7月31日発行)
吉田竹也(編)	『周縁観光論 ― 観光サバルタンの把握に向けて ―(南山大学人類学研究所モノグラフ・シリーズ 2)』(2023年6月23日発行)
人類学研究所(編)	『じんるいけん Booklet 2023 Vol.9 後藤明の研究の歩みと四人の巨人(公開シンポジウム(後藤明教授退職記念)講演録)』(2023年12月20日発行)

人類学研究所スタッフ

所長	渡部森哉	人文学部人類文化学科・教授
第一種研究所員	DORMAN, Benjamin	（外国語学部英米学科・教授）
	宮脇千絵	（人文学部人類文化学科・准教授）
第二種研究所員	ANTONY, Susairaj	人文学部人類文化学科・准教授
	石原美奈子	人文学部人類文化学科・教授
	川浦佐知子	人文学部心理人間学科・教授
	CROKER, Robert	総合政策学部総合政策学科・教授
	張玉玲	外国語学部アジア学科・教授
	中尾央	人文学部人類文化学科・准教授
	藤川美代子	人文学部人類文化学科・准教授
	MUNSI, Roger Vanzila	国際教養学部国際教養学科・教授
	吉田竹也	人文学部人類文化学科・教授
	RIESSLAND, Andreas	人文学部人類文化学科・教授
特任研究員	後藤明	
博士研究員	中川朋美	（2023年9月30日退職）
研究員	髙村美也子	プロジェクト研究員
	竹内愛	プロジェクト研究員
	菅沼文乃	プロジェクト研究員
	加藤英明	プロジェクト研究員
	CAPOBIANCO, Paul Joseph	プロジェクト研究員（2023年11月1日任用）
	DENRONDEN,Harmony	プロジェクト研究員（2023年12月1日任用）

非常勤研究員【2023年度】

氏名	研究課題
張雅	国際化推進事業（第5期）「なりわいと移動の人類学:中華圏の研究者との協同から」担当研究員
謝黎 （聖心女子大学・都留文科大学・兼任講師）	共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」共同研究員
佐藤若菜 （新潟国際情報大学・准教授）	共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」共同研究員
田本はる菜 （成城大学・専任講師）	共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」共同研究員
山崎剛	社会の中の人類学
小坂恵敬	国民国家システムによるパプアニューギニアの伝統的通過の扱い
野澤暁子 （名古屋大学・共同研究員）	中世ジャワ・ヒンドゥー文化のテクストと実践に関する音楽人類学的研究
梅津綾子	多様な家族、性、信仰のあり方−アフリカ、ムスリム・ハウサの「里親養育」慣行、および日本のLGBTムスリムを事例に
辻輝之 （広島大学・准教授）	宗教と移民の社会関係資本・市民参加・共生
Patrick McCartney （Adjunct Lecturer, Kyoto University）	Ancient Street Performers, Espionage and "Yoga": Across and Beyond South Asia
Paul Capobianco （Lecturer, Lingnan University）	How language, culture, and identity reshape notions of identity
岡本圭史	アフリカ都市の宗教人類学―ケニア、ドゥルマ社会における悪魔言説と生活実践
中尾世治 （京都大学大学院・助教）	「インフォーマント」からみたアフリカ史研究史:ヴォルタ川流域のムスリムの歴史についての知識とその流通について
廣田緑 （国際ファッション専門職大学・准教授）	インドネシアのコレクティヴ（美術家集団）にみる現代美術の社会的役割
PETERSEN, Esben （Language Lecturer, Ritsumeikan University）	The Ambivalence of Utopian Ideals in Modern Japan: Christianity's Role in Disseminating the Colonial Fairy Tale of Denmark as a Happy and Self-Sustaining Agricultural Society

人類学研究所通信 第24号

2023

2024年7月31日刊行

南山大学人類学研究所

Anthropological Institute, Nanzan University

編集責任者：宮脇千絵
編 集 委 員：石原美奈子、ドーマン・ベンジャミン、藤川美代子
編集事務局：古澤夏子

〒466-8673　名古屋市昭和区山里町18
TEL: 052-832-3111（代表）
Website：http://rci.nanzan-u.ac.jp/jinruiken/

人類学研究所

デザイン：株式会社サウザンドデザイン